

The background features a collection of abstract geometric shapes and lines in various colors including red, yellow, green, blue, and orange. These elements are arranged in a dynamic, overlapping fashion, creating a sense of movement and depth. Some shapes are solid, while others are outlines or thin lines.

熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」

Kumamoto Artpolis'96

アートポリス第2期 4年間の集大成「アートポリス'96」が半年間にわたって開催された。

テーマは「環境・文化・ひと——熊本の未来とアートポリス」

建築や建物のワク組みを越えて、建物と人、建物と地域との関わりやまちづくりに焦点を当てた、様々な催しが、熊本市、山鹿市、阿蘇町、清和村、泉村の各地で繰り広げられた。

メインイベントである都市デザインサミットには、KAP参加プロジェクト設計担当の建築家をはじめ、国内外から多数のゲストが参加。芸術・文化を通してまちづくりの可能性を探った。

このほか、アートポリス展覧会やいろいろな視点からのシンポジウム、協賛イベントもたくさん行われ、多くの県民がまちやむら、地域について考える機会となった。

熊本国際建築展「くまもとアートポリス '96」

DESIGN SUMMIT

シンポジウム 国際

INTERNATIONAL SYMPOSIUM

- 平成8年11月2日(土)
開会式・基調講演・第一部「アーバニズムとしての建築展」
- 平成8年11月3日(日)
第一部「アーバニズムとしての建築展」(前日の続き)
第二部「新たなパブリック・アートをめぐって」
- 平成8年11月4日(月)
第三部 ラウンドセッション・総括
閉会式

2-4th NOVEMBER 1996, KUMAMOTO JAPAN

◎熊本県立劇場

KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

1988年に開始され、文化としての建設事業を一連に行うことで、事業主体である熊本県全体のアイデンティティ向上に寄与すると共に、まちなみに関する市民一般のイメージを刷新するという役割を果たしてきた「くまもとアートポリス」。このような手法は、すでにヨーロッパの諸都市で試みられていたが、さらに、大きな潮流となっており、また、日本のほかの地方でも、まちづくりに関して独自の動きをするところが増えてきた。そんな状況の中で、'92年の第1回国際シンポジウムは、「くまもとアートポリス」の文化的事業としての位置付けを明確にし、国際的なステータス

【第一部】

アーバニズム としての建築展

第一部では、国内外からまちづくりに関するプロジェクト推進に携わる関係者を招き、各プロジェクトのプレゼンテーションを受けるとともに、相互の哲学やシステム、問題意識についての議論や意見交換を行なった。

を確立させることを目的に、都市デザイン・サミットを中核として行われ、成功した。

その後4年が経過し、「くまもとアートポリス」は、今や国際的にも貴重な事例となり、岡山や長崎の類似事例を生んだ点でも、その存在は大きく、今後も構想を長く推進していく意義は大きい。

今回の第2回国際シンポジウムでは、これまでの二期8年の成果を概観し、さらに次のステップへと進むために、従来の都市デザインとしての建築展という位置付けを推進・強化しながら、アートポリスがまちづくりの一環としてもっと広がりのあるテーマへと進んでいくための議論が、2日半にわたって展開された。

前回と同形式の都市デザインサミットに加えて、今回は建築に限定されがちな事業の可能性を広げ、「くまもとアートポリス」のような事業が果たしうる可能性を探り、芸術・文化を通してのまちづくりの新たな方向性を位置付けし直すための議論の場も設けられた。

アートポリスは、優れた建築物を造り出すことだけが目的であると考えられがちであるが、建築は本来、芸術や文化としての意味も持ち、さらに社会の要請に応えることが求められる分野である。

最近、注目を集めているアートの新しい傾向を見ると、アメリカなどでは、単なる芸術上の事柄にとどまらず、都市や社会において、より広範な問題を取り上げたものが増えてきた。このような事業に広がりを持たせるため、美術館やほかの公共機関が新しい役割を果たそうと動いている。今回の都市デザインサミットは、包括的に建物やアートの可能性を考えるため、アーティストやアートの視点からまちづくりに取り組んでいる国内外のアクティビストを招待。建築、建物のワクを越え、それぞれの立場から自由に意見を交換した。

都市デザインサミット

ゲスト・プレゼンテーション

GUEST PRESENTATION

◆日／平成8年11月2日(土)

◆場所／熊本県立劇場

サンティアゴ・デ・コンポステラ (スペイン) / ヘルラルド・エステベス (サンティアゴ・デ・コンポステラ市長)

グロニンヘン (オランダ) / エド・タヴェルヌ (グロニンヘン大学教授)

レンヌ及びヴィルジュイフ (フランス) / アレクサンドル・シュメトフ (ランドスケープ・アーキテクト)

1-1



特徴ある事業・計画手法を採用している海外の3つの都市の代表が、自分たちの町の事例を、スライドなどを利用して説明した。

まず、サンティアゴ・デ・コンポステラでは、由緒ある歴史的な旧市街を守りながら、現代的な都市機能や建築文化を導入するという一見相反するゴールを目指しつつ、現代建築の表現に関して、国際性と地域性の双方を視野に取り入れている。また、都心部の町並みと、郊外の田園風景とが、いかに現代建築と対話をするかという例が語られ、熊本にとって、大きな示唆を与えてくれる貴重な例となった。次のグロニンヘン市の事業は、歴史的な環境と現代建築の対話を目指している点ではサン

ティアゴ・デ・コンポステラと同じだが、都心部と新しい郊外という立地性や、建物が恒久的な公共施設であるか、仮設の実験的な構造物であるかなどによって、明解に異なる戦略が使い分けられている点で特色がある。そして、建築と他ジャンルの芸術が手を携えるという点で、本シンポジウムの第二部のテーマとクロスする点があった。

また、フランスのレンヌとヴィルジュイフのプロジェクトの例は、一つの都市全体のプロジェクトではなく、特定の地域の面的整備を行なったものだが、そのマスタープランを、建築家ではなく、造園家が手がけたところに、手法上の特色があった。実際にマスタープランを手がけた造園家のアレクサンドル・シュメトフ氏が「まち」や「街区」の設計についてプレゼンテーションしたことで、よりシンポジウム自体に幅広さを加えた。

1-2

議論 1

DISCUSSION 1

◆日／平成 8 年 11 月 2 日(土)

◆場所／熊本県立劇場

議長：磯崎新

パネリスト：ヘラルド・エステベス

アレクサンドル・シュメトフ

岡田新一（建築家・クリエイティブTOWN岡山 コミッショナー）

堀池秀人（建築家・長崎県都市プロジェクト顧問）

川井貞一（宮城県白石市市長・白石メディアポリス）

W・スミンク（クロニンヘン市助役 兼 都市計画担当議員／オランダ）

海外の招待ゲストによるプレゼンテーションに次いで、国内から岡山（クリエイティブTOWN岡山）、長崎（長崎アーバンルネッサンス）の2県と、宮城県白石市（白石メディアポリス）の代表者による独自のまちづくりのプロジェクトがプレゼンテーションされた。岡山では、定住できる都市づくりを、長崎では、マスタープランの中に、非物的なもので取り入れたカウンターマスタープランの提案、そして、宮城では、本来持っている歴史や自然、文化、環境などを掘り起こし再発見しながら進めるまちづくりを、と3県3様の意見が出た。プレゼンターは、プロジェクトの当事者や、建築家、行政の長など異なる立場であり、多角的に各プロジェクトの性格を浮き彫りにすることになり、興味深いものがあつた。

これらの国内プロジェクトとは、すでに95年、熊本で合同のシンポジウムがもたれているが、さらにクロニンヘンの行政代表も加わっ

て、今回は磯崎新コミッショナーを座長に、「都市化を進める時にそれぞれのプロフェッションはどう役立つのか」といった一つの質問について、それぞれの考えを述べた。





このセクションでは、議論1で展開されたものをさらに発展させるために、海外からのゲスト・コメンテーターが加わり、これまでの発表者のプレゼンテーションについて歴史的な面や地域性の違いから、いろいろな意見を述べた。

今回のゲストコメンテーターは、都市計画や環境デザインに関する権威ある発表者ばかりだが、フランス、オーストラリア、シンガポールと、それぞれ異なる地域から招待されているところが、前回のデザインサミットより、さらに進んだともいえる。このような公共的な「建築展」に関しては、国や地域によって異なる制度や慣習、伝統が反映されるが、ここでは、それぞれの地域から見た各プロジェクト及びその哲学や仕組みに関して、興味深い意見が聞かれた。歴史的な伝統を持つヨーロッパのほかには環太平洋の国々からの声に加わり、ヨーロッパとアジアが比較されたことで、一層多角的な議論となった。

議論2

DISCUSSION 2

◆日／平成8年11月2日(土)

◆場所／熊本県立劇場

議長：磯崎新

パネリスト：岡田新一

堀池秀人

川井貞一

ヘラルド・エステベス

エド・タヴェルヌ

アレクサンドル・シュメトフ

ジャン・ルイ・コーエン (パリ第八大学フランス都市生活研究所教授／フランス)

レオン・ヴァン・シャイク (王立メルボルン工科大学教授／オーストラリア)

ティ・ケン・スーン (建築家／シンガポール)

1-3

1-4

議論3

DISCUSSION 3

◆日／平成8年11月3日(日)

◆場所／熊本県立劇場

議長：岡部憲明

パネリスト：ジャン・ルイ・コーエン

ティ・ケン・スーン

ヴィルヘルム・クラウザー (建築家／ドイツ)

【KAP建築家】

桂英昭、新井清一、内藤廣、青木淳

マニュエル・タルディッツ、石田敏明、塚本由晴

2日目の最初のセッションでは、前日のセッションに参加した海外のコメントーターが、それぞれのまちの現在の状況や歴史について切り出し、続いて、「くまもとアートポリス」の二期のプロジェクトを手がけた建築家たちが、自分が担当したプロジェクトについて説明を行なった。その後、ディスカッションへと発展。1日目のサミットが、計画を推進する立場からのスピーチが中心であったのに比べて、もう少し自由な立場から議論が展開された。

環境・風土・景観などを通して、どのように建築と人間を結んでいくかという問題、あるいは、そのような事柄を通じて、文化としての建築がどうしてもぶつかってしまいう国際性と地域性をどう意識するかという問題などについて、具体的なプロジェクトを通じて各建築家がどのように考えているかなどが、海外からのゲストとの対話を通して、浮き彫りにされた。くまもとアートポリスでは、当初から、「都市にデザインを、田園にアイデアを」という標語に示されるように、都市的でグローバルな指向性と、地域的なアイデンティ

ティに應えるような指向性とを併せて目指してきたが、地域的なアイデンティティを模索しながら、近代的な生活環境を整えていこうというような志向性は、今や世界共通の問題であり、ヨーロッパでも、環太平洋の国々でも、熊本を初めとする日本でも変わらないことが証明された。



【第二部】

新たなパブリック・ アートをめぐるって

第二部は、ともすれば建築に限定されがちな

「くまもとアートポリス」の可能性を広げるため、

最近、都市や社会に関連する素材を取り上げるなど、

新しい動きを見せるアートに関連した人を国内外から招き、

それぞれの活動や意見が述べられた。

「くまもとアートポリス」のような事業が果たしうる可能性とは何か。

芸術・文化を通してのまちづくりという新たな方向性を見出すため、

さらに「くまもとアートポリス」の建築家たちとの議論が交された。

ゲスト・プレゼンテーション

GUEST PRESENTATION

◆日／平成8年11月3日(日)

◆場所／熊本県立劇場

ジュリー・ラザール（ロサンゼルス現代美術館キュレーター／アメリカ）

リック・ロウ（アーティスト、アクティヴィスト／アメリカ）

レオン・ヴァン・シャイク

（王立メルボルン工科大学教授／オーストラリア）

岡崎乾二郎（アーティスト／広島・灰塚ダムアースワークプロジェクト

コーディネーター）

木幡和枝（アートプロデューサー／山梨・アートキャンブ

白州実行委員会事務局長）

山野真悟（アーティスト／ミュージアムシティプロジェクト

事務局長）

2-1

くまもとアートポリス国際シンポジウムで初めてアメリカからのプレゼンターが招待された。まず、ここでは、その初参加のアメリカのプレゼンターの代表として、現代美術のもっとも先鋭な企画を打ち出しているロサンゼルス現代美術館(MOCA)のジュリー・ラザール氏が全般的な講演を行った。

個別のプロジェクトとしては、アメリカのリック・ロウ氏のヒューストンの「プロジェクト・ロウハウジズ」、オーストラリアのレオン・ヴァン・シャイク氏が推進したアデレード市のフェスティバルについてのプレゼンテーションが行われた。

「プロジェクト・ロウハウジズ」は、老朽化し、荒廃した住宅地をアート・イベントの組織化を通して

DISCUSSION

◆日／平成 8 年 11 月 3 日 (日)

◆場所／熊本県立劇場

議長：八束はじめ (建築家・くまもとアートポリスディレクター)

パネリスト：ジュリー・ラザール

リック・ロウ

レオン・ヴァン・シャイク

岡崎乾二郎

木幡和枝

山野真悟

長谷川祐子 (世田谷美術館学芸員)

ニック・フェルドンク (グロニンヘン市都市住宅部長／オランダ)

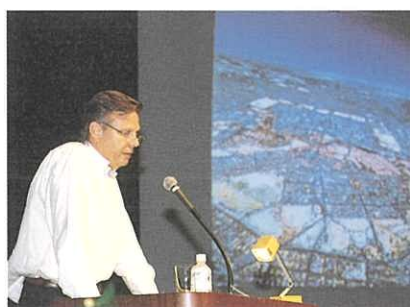
【KAP 建築家】

桂英昭、入江経一、武田光史、吉松秀樹



このセクションでは、第二部のプレゼンターに、日本の美術館の学芸員、オランダ・グロニンヘン市の行政担当者、さらにくまもとアートポリス建築家 4 人が加わり、海外と日本のそれぞれの町の現在の美術館を取り巻く状況や美術館の役割について語った。その中から、「くまもとアートポリス」と美術館の共通点として、どちらも触媒の役割を持つということが確認された。

また、何がいい建築で、何がいいアートなのか問い直さなければいけないほど複雑になってきている現在の状況の指摘、さらには、アートやほかのジャンルが、まちづくりや環境整備にどのような貢献をなし得るかなど、相互ディスカッションが行われた。



て早速すると、この「まちづくり」が地域コミュニティの再活性化にアートが効果を上げたという事例。また、アデレード市のイベントでは、日本からの参加者も含めて、建築家やほかのジャンルのアーティストたちが、環境デザインの新たな試みにチャレンジした事例となった。

国内からは、まず、広島県の灰塚ダム建設に関わる「アースワーク」プロジェクトの報告があった。このプロジェクトは、洪水用のダムの建設に伴って水没するエリアに対して「サイトスペシフィック (敷地に固有な)」という新しいコンセプトに基づいたアートにより、活性化や記憶の保存を行うというもの。山梨県の例は「アートキャンパス白州」、山村に住み着いた舞踏家を中心に行なわれたさまざまなジャンルのアートフェスティバル。単にアート・イベントを行うだけでなく、都会の小学生に農村生活を体験してもらうなど、コミュニティ活動を行ったことでも見逃せないイベントとなった。

最後に、福岡県の「ミュージアムシティ天神」については、開催期間中福岡市の中心地区全体をミュージアムに変えてしまうことで、見慣れている自分の「まち」を見直そうという趣旨のもとに行なわれた作品の数々が発表された。

【第三部】

ラウンドセッジョン



最終日の参加者は19名。立場を離れてのフリーセッションになった。前日までのプレゼンテーションや議論について、納得がない点やもつと深く知りたい点を掘り下げる形で議論は進んだ。例えば、「くまもとアートポリス」は、実験室で行われている実験のようだという海外のパネリストたちから寄せられた意見に対して、アートポリス建築家が、一つひとつ答えることで最終的にはより理解が深まった。

また、ジャンルの違う者が、それぞれの仲間だけで通じる言葉で会話するのをやめ、できるだけジャンルを越えてコミュニケーションすることが大切であるということを確認し合った。そして、「くまもとアートポリス」は、それぞれの建築家たちが個人的なやり方で、その場とのコミュニケーションを始めるところからいろいろな人との出会いも生まれ、いろいろなチャンスもできるといいう言葉で締めくくられた。

◆日／平成8年11月4日(月)

◆場所／熊本県立劇場

議長：八束はじめ

エド・タヴェルヌ、ティ・ケン・スーン、アレクサンドル・シュメトフ

ジャン・ルイ・コーエン、ヴィルヘルム・クラウザー

ジュリー・ラザール、リック・ロウ、木幡和枝

山野真悟、長谷川祐子

【KAP建築家】

岡部憲明、桂英昭、青木淳

マニエル・タルディッツ、塚本由晴

武田光史、吉松秀樹

3

◎総括講演：八束はじめ

◎謝辞：堀内清治（くまもとアートポリスアドバイザー・熊本工業大学教授）

◎閉会：川上隆（熊本県土木部長）

DESIGN

S U M M I T



R E C E P T I O N



熊本まちづくり展

くまもとアートポリス'96

シンポジウム、講演、展示等に加えて、熊本まちづくり展では、アートポリス作品を媒体とした地域との交流の試みが行われた。

例えば、団地での夏祭りやコンサートは、新たなコミュニケーションづくりや施設の新たな利用方法の発見につながった。また、都市建築の重要課題である設備・構造分野においても、先の阪神大震災を踏まえて真剣な議論が交わされた。さらに、今回の建築展の新たな柱である「パブリック・アート」関連のイベントも、この熊本まちづくり展において数多く実施された。

アートストリート

◆日程／平成8年10月29日～11月5日
◆場所／熊本市上通、下通、新市街周辺

- ◆ストリートサイン
- ◆ウォークインギャラリー
- ◆KAP文化祭
- ◆環境・文化発見オリエンテーリング
(10月26日)

期間中、シンボルマークの入った旗がアーケードを彩り、路上にはアートポリス参加作品のパネルが並べられ、道行く人の目を楽しませた。また、ビルの壁を利用したスライド上映会も行われた。

「環境・文化発見オリエンテーリング」には、小学生の友達同士や親子連れが参加。クイズを解きながらのスタンプラリーで、熊本の街のよさを再発見した。

➡「熊本まちづくり展」記録誌3P



S A T E L L I T E E V E N T

アートステーション

◆日程／平成8年10月29日～11月5日
◆場所／熊本市上通、下通、新市街周辺

アーケード街の空き地を利用し、大きな花をかたどったオブジェや、材木を組み合わせたオブジェなどを展示。街がギャラリーに変身した。上通りギャラリーでは、アートと融合したまちづくりを進めている「ファレ立川」の展覧会を開催。プロジェクトに参加した作家のドローイングや模型などが展示された。

二の丸公園での「けんちく祭'96」では、建築についてのパネル展示をはじめ、工作コーナー、出店コーナー、ミニミニ動物園コーナーなど、多くの人で賑わった。

→ 同3P

フランク・ロイド・ライト展

◆日程／平成8年9月3日～8日
◆場所／県立美術館分館



アメリカの建築家で近代建築の巨匠の声高い、フランク・ロイド・ライトの作品が、写真パネル等で紹介された。紹介された作品は、「帝国ホテル」、「自由学園、明日館」など、ライトが日本で作った建物。ビデオ上映などもあり、充実した展覧会となった。



フランク・ロイド・ライトシンポジウム

◆日程／平成8年9月7日
◆場所／上通フィーリングホール

◆講演「ライトの建築」

講師／遠藤楽（遠藤楽建築創作所）

◆パネルディスカッション

「ライトが残したもの、くまもとアートポリスが残すもの」

パネリスト／遠藤楽（遠藤楽建築創作所）

上田憲二郎（上田憲二郎建築事務所）

末廣香織（九州大学助手）

コーディネーター／山田穰（九州東海大学助教授）

フランク・ロイド・ライトの下で建築を学んだ遠藤楽氏が、ライトの作品、生涯、思想について講演。後半はヨーロッパで仕事を経験した建築家やライト研究会などをしたことのある建築家3人がライトの作品の特徴や世界に及ぼした影響について、さらに、アートポリスの意義とライトの共通点などについて話し合った。

→ 同122P





団地のよさを多くの人に知ってもらおうと開催された夏祭り。団地の中庭を利用し、パザー、マジックショー、カラオケ大会、盆踊りなどが行われた。また、設計者である元倉眞琴さんも招待され、祭りに参加。住民と一緒にゲームに参加したり、写真を撮ったりと、祭りを楽しんだ。

⇒「熊本まちづくり展」記録誌156P～

竜蛇平団地夏祭り

◆日時／平成8年8月24日
◆場所／県営竜蛇平団地

KUMAMOTO
ARTPOLIS'96
KUMAMOTO
CITYPLANNING
EXHIBITION

熊本まちづくり展

くまもとアートポリス'96

P O S I U M

オープニングシンポジウム「建築の原点を探る」

- ◆日程／平成8年11月9日
- ◆場所／上通フィーリングホール
- ◆出席者／松田寅和（松田工務店代表）
山口祐造（日本石橋を守る会事務局長）
鈴木 明（建築都市ワークショップ代表）
大住和子（水環境会議熊本会長）
- ◆コーディネーター／宮木竹雄（「くまもとアートポリス'96」熊本まちづくり委員会副委員長）

建築の枠を越えたさまざまな分野から、4人のパネリストを迎えて開催。日本の伝統建築がどのように伝承されているか、建築物の材料と寿命についてなど、それぞれの視点から活発な意見が飛び出した。会場には、建築関係者をはじめ学生や一般市民など約70名が訪れた。

⇒ 同36P



施工者シンポジウム「伝えたい熊本の建築」

◆日程／平成8年11月17日

◆場所／熊本学園大学

◆落語

前田芳男 熊本素人落語会／熊本開発センター

◆パネルディスカッション

「伝えたい熊本の建築」

パネリスト／川越忠信（左官：カワゴエ代表取締役社長）

笹原 弘（建築：建吉組代表取締役会長）

辰巳 隆（建具：辰巳建具工場代表社員）

藤本勝己（鬼瓦：藤本鬼瓦製作所代表）

コーディネーター／

後藤道雄（くまもとアートポリス'96

熊本まちづくり委員会委員長）

サポーター／東城泰徳（熊本県土木部建築課長）



前半は、職人の世界を描いたお馴染みの落語を堪能。後半では、熊本の気候風土にねざした、伝統的な建築技術の再生について、各分野の第一人者たちが集まって、現状との伝統技術の優位性を紹介。さらに伝統技術を生かした新しい建築文化をつくるためのいくつかの提案もなされた。

⇒ 同110P～

シンポジウム ●●●

S Y M

構造シンポジウム「熊本の建物は安全か」

◆日程／平成8年11月16日

◆場所／熊本学園大学

◆講演「熊本の地震」

講師／松田時彦（熊本大学理学部教授）

◆パネルディスカッション「熊本の建築は安全か」

パネリスト／岩下修一（行政：熊本県土木部建築課主幹）

大久保全陸（学会：九州芸術大学教授）

新納至門（意匠設計：建築家）

西島衛治（利用者：熊本県集合住宅研究所所長）

松尾伯方（構造設計：伯建築事務所所長）

コーディネーター／

小川厚治（学会：熊本大学工学部教授）



第1部では、松田時彦教授が熊本の地震について、その特徴や時期、規模など、地質学の観点から講演。第2部では、構造設計、意匠設計など専門家と行政担当者が、建築基準法を中心に現状の問題点を挙げた。また、阪神大震災後、出てきたマンション問題についても活発な意見が出された。

⇒ 同62P

くまもとアートポリス'96
熊本まちづくり展

設備シンポジウム「地震がきても暮らせますか」

日時／平成平成8年11月16日
場所／熊本学園大学



◆講演「阪神大震災に学ぶ」

講師／水野稔
(大阪大学工学部教授)

◆パネルディスカッション

「熊本のライフラインを検証する」

パネリスト／富永健一郎（NTT九州支店設備運営センター所長）

高田利則（西部ガス熊本支店保全担当課長）

山川達夫（九州電力熊本支店電力課長）

島田寛三（熊本市水道局建設課水道審議員）

コーディネーター／

水野稔（大阪大学工学部教授）

講演では、阪神大震災の際のライフライン（電気、ガス、水道、電話など）の被害状況、回復日数などを紹介。実際の修復作業の様子などが、スライドやグラフで説明された。座談会には、熊本のライフラインの各分野の専門家が出席。熊本で地震が起きたらという想定のもと、熊本の整備状況や、修復方法と対策などについて話し合われた。

⇒「熊本まちづくり展」記録誌84P～

O S I U M

VOICE



熊本まちづくり展実行委員会

西田 健一

●熊本デザイン専門学校講師

熊本におけるアートポリスとは、官主導か民創出かといった問題の新しい解を見つける作業でもあると思われる。変革には人々のボランティアが必要であり、まちづくり展とはその呼び掛けだったのだと認識している。しかし、そのボランティア行為もモラルを失った時には迷走し、テロへと変容する危険性さえはらむ。

アートポリス構想のモラルとは何か、その御旗をふるうのは誰か（何か）。ボランティアのエネルギーを継続する鍵はそのあたりにあるのではないだろうか。

利用者シンポジウム 「新地で語ろう未来の団地」

◆肥後にわか

◆パネルディスカッション
「新地で語ろう未来の団地」

出席者／住民代表5名
コーディネーター／
永本義博（三ツ矢建設株式会社設計室長）

熊本市最大の公営住宅で、アートポリス作品でもある「熊本市営新地団地」新地団地を題材にした肥後にわかで始まった利用者シンポジウムには、子ども連れの主婦から老人まで約50人が団地内の集会場に集まった。後半は、住民代表が「コミュニケーション」「防犯」など6つの項目で住まい方について意見を出し合った。また、防音、防湿、街灯、柵の造り方など、住み手ならではの指摘も出され、今後のアートポリス集合住宅の在り方のよい参考となった。

→ 同48P～

◆日程／平成8年11月10日
◆場所／熊本市営新地団地集会所



学生シンポジウム「VS21」

◆日程／平成8年11月4日
◆場所／スタジオライフ

シンポジウム ●●●

S Y M P

パネリスト／梅林克（建築家：カツ ウメバヤシ
アーキテクト オフィス）
塚本由晴（建築家：アトリエ ワン）
土居義岳（建築史家：九州芸術工科大学助教授
選出された11チームの学生
コーディネーター／
桂 英昭（建築家：熊本大学工学部講師）

現在計画中の阿蘇草千里公衆トイレをテーマに、学生たちが新たに計画。その中から選出された11チームが公開プレゼンテーションを行い、それに若手建築家たちが意見を出し合った。塚本氏が示す「第3の道」について、白熱した議論が展開された。

→ 同12P～



山鹿まちづくり展

くまもとアートポリス'96

八千代座を中心に、伝統と新しさの調和のとれたまちを目指す山鹿市では、豊前街道をメイン会場にまちづくり展が開催された。参加者の多くは山鹿市民。スタンブラリーや寺子屋塾などのイベントを通して、山鹿の素晴らしさを改めて認識。まちづくりに対する市民の意欲を喚起した。

オープニングイベント

◆日時／平成8年10月12日
◆場所／お祭り広場・山鹿市民会館・豊前街道沿道



- ◆屋台村（熊本うまかもん大集合）
- ◆鶴屋百貨店バトンクラブパレード
- ◆オープニング式典、写真コンテスト・景観賞表彰式
- ◆スッポン鍋の大盤振舞い
- ◆熊本移動芸術祭 熊本交響楽団コンサート
- ◆郷土芸能祭（山鹿太鼓、茶山唄おどり、山鹿灯籠踊り）

鶴屋百貨店バトンクラブと人力車に乗った灯籠娘のパレードでスタート。屋台村のあるお祭り広場には、市民や観光客など約920名が詰め掛けてスッポン鍋などを楽しんだ。ステージ上では、写真コンテスト入賞者13人、まちづくりに貢献した16人の表彰。19時からは山鹿市民会館に会場を移し、熊本交響楽団によるコンサートに酔いしれた。また、コンサート終了後は、お祭り広場にて山鹿太鼓、鹿北町の茶山唄おどり、山鹿灯籠踊りが披露された。

→「山鹿まちづくり展」記録誌3P～

VOICE

山鹿まちづくり展を終えて



山鹿まちづくり展
実行委員会
井上 勝介

●(株) 熊本県建築士会 山鹿支部長

山鹿のまちづくりに少しでもお役にたつ事が出来ればとの思いで「人の相集い交流するやさしいまちづくり」のテーマのもとに約8ヶ月、良いスタッフに囲まれ、多くの方々の助言をいただきながら手づくりでやってきた活動も終わり「やってよかった」という実感が今だ余韻として残っている。この事業が多くの人々の心に残り、これが発火点となって少しでも街並み整備等に役にたつ事が出来たらと思う。この事業を支えて下さったスタッフに対し深く感謝し敬意を払いいたい。

伝統と未来のまちづくり 講演会

◆日程／平成8年10月13日
◆場所／山鹿市民会館

- ◆第一部「わたしの国と日本」
～外国人から見た山鹿の街～
コーディネーター／小松一三
パネラー／マリア・ライアン
カイル・レイノルズ
カール・ヘッセル
- ◆第二部「常田富士男のあったか話」
講演／常田富士男



第一部では、鹿本郡市在住の3人の外国人のパネリストたちが、自国と山鹿を比較して発表。山鹿の魅力やまちに対する要望などを折り混ぜて話した。第二部では、俳優の常田富士男さんが、2つの物語を朗読して、人の心を育てるまちづくりの提案をした。

→ 同7P～





まち並みウォッチング スタンプラリー

◆日程／平成8年10月13日

◆場所／豊前街道沿道

◆スタンプ会場／お祭り広場、天聴の酒蔵、蔓薔薇、
八千代座・夢小蔵、灯籠民芸館、千代の園酒造、木屋食品、
薬師堂、山鹿市民会館

お祭り広場をスタートして、八千代座や山鹿灯籠民芸館など豊前街道沿いの9つのスタンプ会場を回るスタンプラリー。保育園児から90歳の老人まで約300人がそれぞれのペースで豊前街道の散策を楽しんだ。9カ所すべてを回り、課題である「アートポリス'96山鹿」の文字を完成させた人には、抽選で地域の産物などが賞品として贈られた。

→ 同 25P～

アートポリス参加作品パネル展・ 豊前街道シノラマ放映 他

◆日程／平成8年10月12日～18日

◆場所／天聴の酒蔵

◆県アートポリス参加作品パネル展

◆豊前街道絵画展

◆豊前街道シノラマ放映

◆山鹿傘展

期間中、土蔵造りの天聴の酒蔵にはアートポリス参加作品のパネルや、山鹿市在住の服部秋彦さんが描いた豊前街道の淡彩画、すでに滅びてしまった山鹿の特産品・山鹿傘を展示。また常時、シノラマも放映され、情緒たっぷりの蔵でたくさんの人が作品に見入っていた。

→ 同 33P～



豊前街道まち並み写真展・ 骨董看板展・ 社寺仏閣パネル展

◆日程／平成8年10月12日～18日
◆場所／千代園酒造の蔵・木屋食品

◆豊前街道まち並み写真展

◆山鹿骨董看板展

◆鹿本郡市社寺仏閣パネル展

江戸や明治時代に建てられた古い建物が立ち並び豊前街道。その沿道で明治時代から酒造を営む千代の園酒造では、最優秀賞の大木国重さんの作品『街道散策』を始め、豊前街道写真コンテスト入賞作品を展示。木屋食品には、自前の骨董看板が並べられ、建物内では、鹿本郡市の神社や観音堂などのパネルも展示された。

→ 同 33P～

山鹿・鹿本地方の匠の技展

◆日程／平成8年10月12日～13日

◆場所／お祭り広場ほか



◆灯籠製作実演

◆来民うちわ制作実演及び販売

◆竹製品の製作実演及び販売

◆酒づくりの工程紹介

山鹿の伝統工芸品、山鹿灯籠。『山鹿灯籠の店なかしま』では、製作現場が随時見られる。千代の園酒造の酒造資料館では、酒づくりの工程も紹介された。また、お祭り会場では富永忠治さんが竹製品作りを披露した。

→ 同 37P～

豊前街道寺子屋塾

◆日程／平成8年10月18日

◆場所／天聴の酒蔵

◆講演「山鹿と豊前街道～
山鹿の背骨・豊前街道～」
講師／荒木栄司さん(郷土史家)

熊本市在住の郷土史家、荒木栄司さんが豊前街道や山鹿の歴史について講演。山鹿市民を中心に約80人が集まった。その後、お茶とお菓子が配られ、休憩を挟んでのフリートーク。参加者からは質問や意見も飛び出した。

→ 同 39P～

くまもとアートポリス'96 阿蘇まちづくり展

阿蘇まちづくり展のテーマは、「環境と地域づくり」

講演とパネルディスカッションでは、都市との交流によって活性化を図る

阿蘇地域の今後の方向性について語り合いあった。

また、それより先駆けて行われた農村公園アートプロジェクトコンペ公開審査では、

磯崎新コミッションの審査、講評に若い建築家たちが熱いまなざしを送った。

地域住民に対しては、夏目漱石来熊百周年を記念したオリエンテーリング、

写真・絵画の展示など、阿蘇の自然環境と景観の素晴らしさを再確認するイベントとなった。

農村公園アートプロジェクト コンペ最終審査



◆日時／平成8年10月18日

◆場所／阿蘇町立体育館

平成10年4月オープン予定の農村公園内に置くアート作品を一般から募集、その公開審査が磯崎新コミッショナーを審査員に迎えて行われた。まず一時審査で、応募総数167点から15点に絞られ、最終的には最優秀賞1点、優秀賞3点、佳作6点が選ばれた。最優秀賞は東京在住の堀正人さん。

⇒「阿蘇まちづくり展」記録誌41P～

VOICE



阿蘇まちづくり展実行委員会

日田 勝也

●阿蘇町役場企画総室

多くの方々のご協力により、無事終了する事ができました。心よりお礼申し上げます。今後とも、地域住民の方々にまちづくりへの参加認識を高めて、阿蘇の将来像を各種団体の方々と議論しながら具体化していきたいと思っています。

また、農村公園アートプロジェクトコンペティションの公開審査で決定しましたアート作品が平成9年度に完成する予定です。今回の作品が町にとっての新しい顔になることを期待しております。

オープニングイベント

◆日程／平成8年10月26日

◆場所／農村環境改善センター

◆鶴屋百貨店バトントワラー

◆阿蘇高校・阿蘇北中学校のプラスバンド

◆八特太鼓（陸上自衛隊）

まちづくり展は、音楽と踊りでオープン。参加者たちは、華麗な衣装に身を包んだ女性たちによるバトン演技、阿蘇町の中高生によるプラスバンド演奏、自衛隊隊員による八特太鼓を楽しんだ。

⇒ 同2P～



まちづくりシンポジウム

◆日程／平成8年10月27日

◆場所／農村環境改善センター

◆講演 「多自然居住の時代を迎えて～美しさをキーワードに」
講師／宮口侗迪（早稲田大学教授）

◆座談会

出席者／宮口侗迪（早稲田大学教授）

小野寺 浩（環境庁九州地区国立公園野生生物事務所長）

石本春夫（阿蘇町商工会会長）

佐藤敏満（熊本県建築士会阿蘇支部長）

コーディネーター／

若井康彦（阿蘇環境デザインセンター事務局長）



地方のまちおこしに関して豊富な情報と経験を持つ宮口侗迪教授が、阿蘇町の可能性と課題について講演。また、地元商工会や建築士会が町内の整備計画について行ったワークショップの成果を披露した。後半は環境および、地域づくりに携わる、町内外のオピニオンリーダーたちが阿蘇町の観光振興とまちづくりについて意見を交換した。

⇒ 同 7P～

まちづくり体験オリエンテーリング大会

◆日程／平成8年10月26日

◆場所／農村環境改善センター（集合）

◆徒歩コース

（内牧地区）7km

◆サイクリングコース

（サイクリング史跡・公園コース）21km

まちづくりの一環で整備された施設を町の人に知ってもらおうと企画されたオリエンテーリング。園児から90歳代までの老若男女が、夏目漱石が投宿した旅館やモデルとなった寺、田子山など、ポイント毎に出題されたクイズに答えながら健脚を競った。

⇒ 同 31P～

◆阿蘇の景観・地域住宅写真

◆町内小学生の風景画

◆地域づくりの模型提案

◆パソコン体験

環境とアートポリス展

◆日程／平成8年10月21日～27日
◆場所／農村環境改善センター

阿蘇の環境保全を訴えた写真展示コーナー、阿蘇町HOPE計画の紹介コーナー、町内の小学生の風景画展示コーナーなど、阿蘇の自然環境と景観の素晴らしさを再確認してもらうための展示物が設置された。また、一角には阿蘇町の地域づくりの将来を考えた模型や、くまもとアートポリス作品、これに先だって決定した「農村公園アートプロジェクト」コンペ入賞作品も併せて展示された。

⇒ 同 37P～



清和むらづくり展

くまもとアートポリス'96

江戸時代から清和村に伝わる文楽。その専用舞台である清和文楽館がアートポリスで造られて4年。

今回のむらづくり展では、独自の木組みを用いた文楽館の製作過程を3分の1の模型を使って再現した。

また、村の小学生が文楽や文楽館をテーマにした学習成果を発表したり、

村民が清和の好きなところや改善したいところなどを探して発表するなど、

村民がふるさと文化・農村文化を再発見する場となった。

村づくり大発表会

- ◆日時／平成8年8月3日・4日
- ◆場所／清和村民体育館

- ◆ガリバーマップ展示
- ◆清和の歴史・写真展
- ◆小中学生が描く清和の未来展
- ◆アートポリスパネル展示



体育館の床いっぱいに広がった村の地図に、村民たちが、清和の好きなところ、改善したいところを写真とコメントを書き添えて作ったガリバーマップ。訪れた村民たちは、地図上で道をたどったり、自分の家を書き込んだりして楽しんだ。

また、壁面には小中学生たちが「わたしのすきな せいわ いま・そして未来」と題して、ふるさとを思い思いに描いた絵が展示された。「中学生が見た清和村コーナー」には、中学生が「もっとも清和らしいところ」を撮った写真を展示。また、昭和初期の集落など懐かしい写真も一緒に展示された。

⇒「清和むらづくり展」記録誌35P～

VOICE



清和むらづくり展
実行委員会

坂本 正文

●清和小学校教諭

8月4日に開催された清和むらづくり展「子ども未来フォーラム」では、清和の子どもの生き生きとした姿をたくさんの方々にみていただきました。

フォーラムを通して、子どもは、自分のふるさとを見つめ、そのよさを再発見しました。子どもが、ふるさとを愛し、誇りに思うことは、その子の生きる支えとなります。

清和には文楽があり、そして文楽館があります。今、清和の子は、ふるさとの原風景を心の中に刻み込みました。



清和文楽人形芝居観劇会

- ◆日程／平成8年8月4日
- ◆場所／清和文楽館

清和文楽は村に代々伝わる伝統芸能。一時は衰退したもの、今は年250回の公演をこなすまでの盛況ぶりだ。また、途絶えていた浄瑠璃も、若い太夫たちがしっかりと育っている。この日は「壺坂霊験記～山の段～」を外題に、清和文楽保存会が人形芝居を披露した。

⇒同40P～



清和文楽邑軸組模型組立ワークショップ

◆日程／平成8年8月3日

◆場所／清和文楽邑



清和文楽館展示棟の屋根部分に用いられたバット工法と、舞台棟天井部分に用いられた騎馬戦組手工法を、実際に3分1の軸組模型を使って組立て体験をした。県内外の建築関係者をはじめ、高校・専門学校・大学の建築学科の学生たちが参加。設計者の石井和紘さんや施工者の日動工務店の説明を聞きながら、あるいは質問をしながら作業に取り組んだ。

→同3P～

清和牛バーベキュー交流交歓会



ワークショップ終了後、参加者と地元の人たちが、特産の清和牛でバーベキューを楽しんだ。設計者の石井和紘さんも参加し、文楽館の組立ての話や村の話で夜遅くまで賑わった。

→同42P～

村づくりフォーラム

◆日程／平成8年8月4日

◆場所／清和文楽館

「子ども未来フォーラム」では、国立清和小学校5・6年生たちが「ふるさと学習」の成果を発表。内容は、清和文楽の歴史、文楽館の造り、あるいはそこで働く人々の思いなどを、関係者に取材してまとめたもの。資料（手作り新聞）や司会進行もすべて小学生たち自身で行った。

スライドリポートでは、清和村の「文楽の里づくり」構想からアートポリス事業への参加、今日の成功に至る経緯を、兼瀬哲治文楽邑支配人がリポートした。その中で得られた発想の方法や価値転換の話は、地域づくりのキーワードを呈していた。

また、これまでいくつかの地域づくりに関わってきた木下勇千葉大助教授が、新潟県小国町の事例をスライドを用いて紹介。町民全員で行った「町の宝さがし」が、町民主導のまちおこしへと進展しているという例を上げながら、村の在り方を村民全員で考える機会を設けることを進言した。

→同7P～

◆子ども未来フォーラム

◆スライドリポート

◆講演 「私の風景を守り・造る

～未来を拓く全員参加の地域づくり～」

講師／木下勇

千葉大学園芸学部助教授・緑地・環境学科、地域計画学研究室



くまもとアートポリス'96 泉むらづくり展

平成9年4月、泉村にアートポリス参加作品『ふれあいセンターいずみ』が誕生する。

今回のイベントは、その棟上げを記念して、講演やパネルディスカッション、

物産販売や五家荘を巡るツアーなどが行われた。

今回のむらづくり展は、村民や参加者たちが、泉村に眠る価値を再発見するきっかけとなった。

棟上げシンポジウム

◆日時／平成8年9月14日

◆場所／ふれあいセンターいずみ建設現場

斎藤章一さんの講演「交流を通じた村づくり」では、自然の恵みがもたらす「食」を介して、これからの都市と農村の交流が生まれると指摘。また、パネルディスカッションでは、村長の清水弘さん、泉村の建築物に携わった武田光史さんと内田文雄さんが、泉村に眠る観光資源や自然資源、棟上げされた施設の利用法など、泉村の価値について討論し合った。後半では、来場者からの意見も飛びだし、より中味の濃いものとなった。

↓「泉むらづくり展」記録誌CD

◆講演「交流を通じた村づくり」

講師：斎藤 章一 国土庁審議官

◆パネルディスカッション

テーマ「泉村の価値を語る」

コーディネーター／清水義次（アフタヌーンソサエティー代表取締役）

パネラー／清水弘（泉村村長）

武田光史（ふれあいセンターいずみ設計者）

内田文雄（久連子活性化センター古代の里設計者）



海と山を結ぶ物産展示即売会

◆日程／平成 8年9月14日

◆場所／ふれあいセンターいずみ建設現場

棟上げシンポジウムの記念イベントとして、物産展示販売が行われた。泉村からは各種団体や専門店が出店し、さらに泉村の友好町村である大矢野町が協賛出店。テントには、お茶やシイタケなどの村の特産物に加えて、大矢野町の海産物も並べられ、訪れた人たちを楽しませた。

→同 35P～



初秋の平家伝説の里めぐりツアー

◆日程／平成 8年9月14日～15日

◆場所／泉村一円

棟上げシンポジウム終了後、応募していた参加者に、建築家の武田光史さんと内田文雄さんも同行。五家荘を中心に泉村の観光資源をバスで見学した。夜は、民宿で郷土料理を味わいながら、交流会が行われ、これからの泉村のありかたについてさまざまな意見が飛び交った。

→同 29P～



VOICE

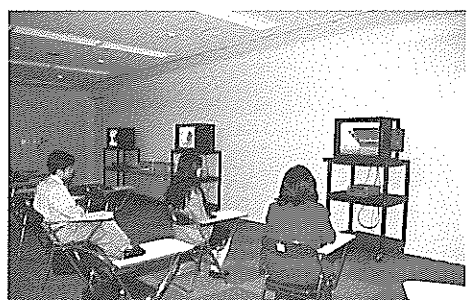


泉むらづくり展実行委員会
西坂 栄樹

●泉村企画振興課

泉村は、豊富な天然資源を活かした観光産業導入に備え、村民との重なる協議の結果「平家伝説の里づくり」基本構想を策定しました。過疎対策に明確なものはありませんが、その中であって泉村も懸命に取り組んでいるところです。

現在までに五家荘を中心に広大な村域で観光施設を整備してきたところですが、これらの相互連携を図り各施設を充分機能させることが今後の課題です。「ふれあいセンターいずみ」は観光客そして地域へのインフォメーションセンターの役割を持つ施設です。泉むらづくり展を機にさらに村民が一丸となればと思います。



くまもとアートポリス 参加建築展

「くまもとアートポリス」参加プロジェクトの全容を、写真パネルや模型、ビデオ、マルチメディアで紹介。

1988年に始まった「くまもとアートポリス」事業の参加プロジェクトの全容をはじめ、「くまもとアートポリス推進賞」、「くまもとアートポリス・デザインコンペティション'95」、「くまもとアートポリス'92選定既存建造物」を写真パネルや模型、ビデオ、マルチメディアで紹介。

また、「都市デザインサミット」で取り上げた、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ、オランダのグロニンヘン、日本のクリエイティブTOWN岡山など国内外16のプロジェクトのまちづくりの様子も併せて展示した。

- 平成8年11月1日(金)～12月1日(日)
- 熊本県立美術館分館

展

覧

会

ア
ー
ト
ポ
リ
ス

くまもとの風景展 〈建築文化と遺産〉

くまもとアートポリス'92選定既存建造物46点、くまもとアートポリス推進賞受賞建造物8点、また'95年に行われたデザインコンペティションの受賞作品を展示。



世界のまちづくり展 〈PART1：環境と文化〉

主に環境、文化の視点から都市の再構築やまちづくりを進めている海外、国内の事例を紹介。



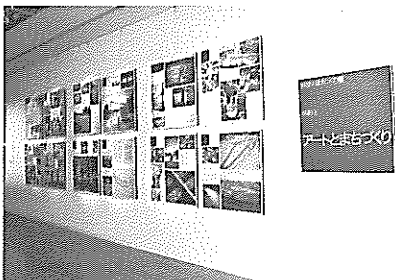
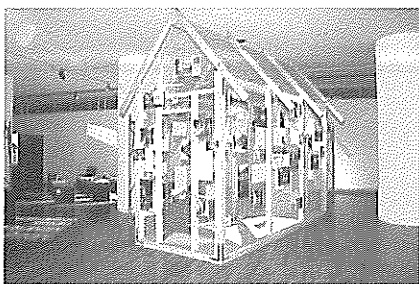
- **サンティアゴ・デ・コンポステラ**（スペイン・サンティアゴ・デ・コンポステラ市）
年間数百万人の巡礼者を集めるキリスト教聖地。歴史的都市の再構造化と新しい都市機能の配置及び、自動車道路網の配置を行っている。
- **IBAエムシャーパーク**（ドイツ・ソルトライン・ヴェストファーレン州）
ルール工業地帯として知られ、現在は産業構造の転換から沈殿しつつある地域の環境的、文化的再興を進めている。
- **グロニンヘン**（オランダ・グロニンヘン市）
都市部と郊外の開発を景観的、建築文化的な観点から行っている。
- **ベルシー地区ZACプロジェクト**（フランス・パリ市）
巨大なワイン倉庫街の住宅団地再開発の事例。
- **ヴィレーヌ川周辺地区再開発**（フランス・レンヌ市）
長い間暗渠にされてきた川を回復させ、地区全体に機能する公共空間を整備している。
- **オートブリュイエール地区ZACプロジェクト**（フランス・ヴィルジュイフ市）
造園計画を核とした住宅団地整備の事例。
- **クリエイティブTOWN岡山**（岡山県）
「都市環境の創生」という目標のもと、建築単体ではなく地域や環境への働きかけを目指している。
- **長崎アーバン・ルネッサンス**（長崎県）
長崎都心・臨港地帯を「情報交流拠点都市」として再開発。
- **白石メディアポリス**（宮城県・白石市）
「都市プロデューサー」がつくったマスターイメージをもとに、ワークショップなどによる市民参加のまちづくりが進んでいる。





世界のまちづくり展 〈PART2:アートまちづくり〉

各地の事例により、アート
によるまちづくりの可能性を
紹介。



●アメリカの新しいパブリックアート

人種や階級、性差などに対する提案や批判を含んだ動き、
地域開発や文化事業といった枠組みでは覆いきれない都市問題解決の糸口を探る。

●プロジェクト・ロウ・ハウズ (アメリカ・ヒューストン市)

スラム化していた労働者階級住宅再生のプロジェクト。
改修や修復に多くのアーティストやボランティアが参加した。

●ルインズ・オブ・フューチャー (オーストラリア・アデレード市)

国際的な建築家や美術家が「未来の廃墟」展を開催。オーストラリア開拓の過去と未来を占った。

●灰塚アースワークプロジェクト (広島県・総領町、吉舎町、三良坂町)

ダムによって水没する地域に対して、その河川敷の利用形態を提案。

●アートキャンプ白州 (山梨県・白州町)

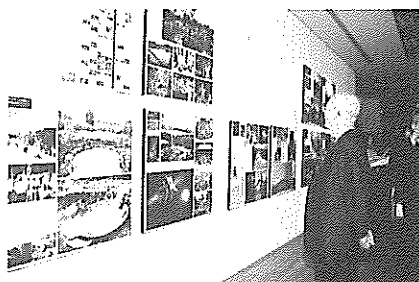
演劇やアート、様々なイベントを通してまちを活性化する試みが行われている。

●ミュージアムシティ・天神 (福岡県・福岡市)

福岡市天神の公共空間を舞台に繰り広げられるアートフェスティバル。

●水俣メモリアルデザインコンペティション (熊本県・水俣市)

水俣病の教訓を後世に伝え、水俣病の犠牲となった多くの生命の慰霊と鎮魂の祈りを捧げる
水俣メモリアルのデザインを国内外から募集した。



今回のくまもとアートポリス'96では、各まちづくり展・むらづくり展のほかにも、協賛事業として建築・建設業界や自治体あるいは学会の主催による多くの催しが行われた。

くまもとアートポリス'96 協賛事業

JIA熊本建築家の会 第8回会員作品展

■主催：(社)日本建築家協会九州支部熊本建築家の会
■期日：平成8年7月2日～7月7日
■場所：県立美術館分館（作品展）、スタジオライフ（シンポジウム）

作品展では、「住宅（すまい）、現在（いま）」をテーマに、団地を中心とした建築プロジェクトをパネルで紹介。また、シンポジウムでは、新地団地の設計を担当した西岡弘氏、上田憲二郎氏を交えて、住宅の在り方を探った。

スペースストラクチャーセミナー

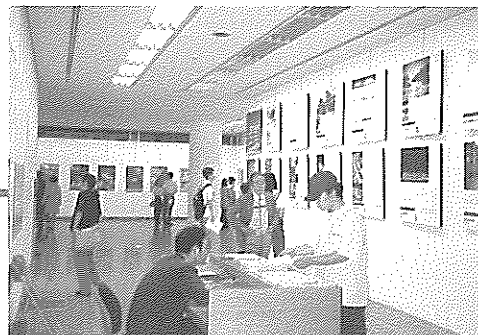
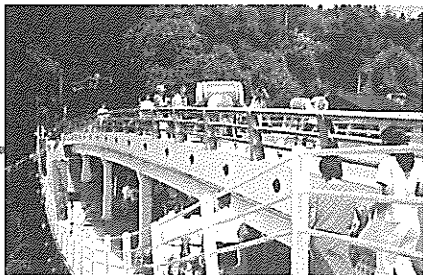
■主催：熊本大学地域共同研究センター
■期日：平成8年7月～平成9年1月（毎月1回）
■場所：熊本大学工学部工学研究機器センター講義室他

講師に小松清氏（太陽工業株式会社膜構造研究室長・工学博士）を招き、スペースストラクチャー（空間構造）についての最新の設計、施工技術を紹介した。

水遊祭

■主催：蘇陽町
■期日：平成8年7月27日
■場所：蘇陽町馬見原橋周辺

平成7年に完成した馬見原橋（アートポリス参加作品）の独特の構造を活かした様々な催しを行った。橋の上層部（車道）では郷土芸能の披露、中層部の歩道では討論会やカラオケ大会。そして、下部の河川敷では魚のつかみ取り、いかだレース、花火大会と盛りだくさんのプログラムで臨まれた。祭りには、大勢の地域住民が参加。単に通過するだけでなく「いこいの場」としての馬見原橋の存在を再認識していた。



1996サマーフェスタ（有明フェリーサンライズ納涼船）

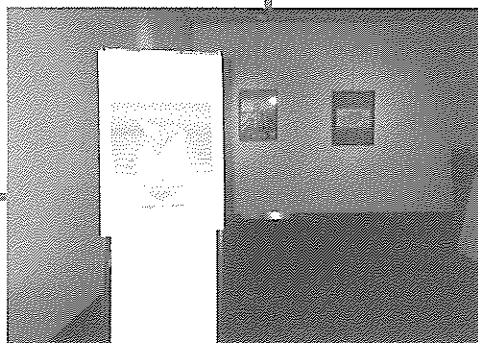
■主催：有明海自動車航送船組合
■期日：平成8年7月31日～8月4日
■場所：長洲港ターミナル、サンライズ（船舶）

リニューアルオープンした長洲港フェリーターミナル（アートポリス参加作品）の快適空間をアピールするため、ターミナル内で地元特産品の展示即売や金魚すくいなどを実施。納涼船も運行した。

第4回熊本建築パース展

■主催：熊本建築パース展実行委員会
■期日：平成8年9月10日～9月16日（八代会場）
平成8年9月25日～10月4日（熊本会場）
■場所：八代市立博物館未来の森ミュージアム（八代会場）
熊本県建設業会館ロビー（熊本会場）

県内在住の24名の手による建築パースを展示。アートポリス参加作品をはじめとする多くの建築物を「絵画作品」として展示することで、多くの県民に建築物やアートポリス作品の魅力をアピールした。



アートボリスに オーケストラがやってきた！

■主催：アートボリスを考える会
■期日：平成8年9月21日
■場所：熊本市営新地団地D棟～E棟間芝生広場

アートボリス参加作品である新地団地やアートボリスをもっと知ってもらおうと、団地内の芝生広場で野外コンサート、クイズ大会、バザーなどの催しを行った。野外コンサートには熊本を代表する声楽家である佐久間信一氏、志岐由里子氏、熊本ユースシンフォニーオーケストラが出演。会場には団地住民や周辺住民に加えて、遠く荒尾市や人吉市からも聴衆が詰めかけ、美しい音色を堪能するとともに、アートボリス建築物の素晴らしさを実感していた。



カラーシュミレーション「色が街を創る」

■主催：くまもと産業デザイン協議会
■期日：平成8年9月19日～平成8年9月24日
■場所：熊本市上通ギャラリー

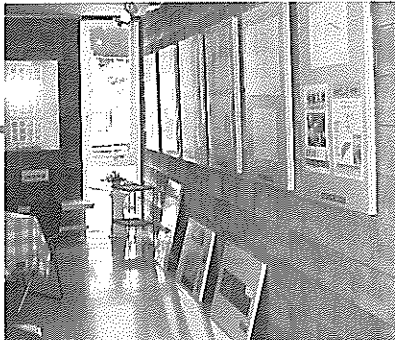
「建物づくり」や「住民活動」あるいは「特産物開発」といった従来の視点ではなく、色彩から見たまちづくりをシミュレート。アートボリスの色彩面での評価も併せて行った。



グリーンゲイトアートボリス展

■主催：グリーンゲイトファミリー
■期日：平成8年10月7日～平成8年10月21日
■場所：津奈木町グリーンゲイト

津奈木町の新しいシンボルとなったグリーンゲイト（アートボリス参加作品）で地元の小学生による「グリーンゲイト絵画展」や水俣工業高校建築科生徒が「暮らしと建築文化」を題材に作成した作品を展示。町民のアートボリスへの理解を深める機会になった。



「暮らしと建築文化」を題材に作成した作品を展示。

「アートボリスとくまもとの色を話そう」

■主催：くまもと公共の色彩を考える会
■期日：平成8年10月9日
■場所：熊本市国際交流会館6Fホール

色彩を切り口にまちづくりを進めることを目標にシンポジウムを実施した。シンポジウムでは色やデザインの専門家に加えて、当日来場した一般市民も話の輪に加わり全員でディスカッションを行った。



熊本県技能祭ハンズワールド'96

■主催：熊本県技能祭実行委員会
■期日：平成8年10月10日～平成8年10月14日
■場所：熊本市白川河川敷

建築をはじめ内外装、造園などの各種技能の高さを広く市民に知ってもらうことを目的に開催。木工品の即売や様々なアトラクションを行った。



親子木工・竹細工教室

■主催：八代建築設計監理協会

■期日：平成8年10月19日～平成8年10月20日

■場所：八代市球磨川河川敷運動場

アートボリス参加作品の写真パネルや泉村ビジターセンター、八代市博物館未来の森ミュージアムの模型展示、竹細工教室や木工教室などを行った。



第八回 何か発見歴史回廊城下町

■主催：一新まちづくりの会

■期日：平成8年10月26日～平成8年10月27日

■場所：熊本市新町界限

城下町の面影を今なお残す新町の良さを見つめ直し、未来のまちづくりを考えることを目的に開催。参加者は新町の風景に似合う建物についてのシンポジウムや新町の建物を見て回るウォークラリーを通じて、後世に残り得たものの魅力と、それを残した新町の素晴らしさを再認識した。



橋梁デザイン・シンポジウム

■主催：(社)熊本県建築士会

■期日：平成8年10月29日

■場所：スタジオライフ

これまで主に土木の領域であった橋をテーマに取り上げ、橋の設計の在り方として機能性、耐久性、構造的な要素で求められるものはないかを討論。地域社会の景観づくりや環境づくりに大きな役割を果たしているアートボリス参加作品のいくつかの橋の存在がクローズアップされた。



アートボリスと共に/ 熊本の建築作品展

■主催：(社)熊本県建築士事務所協会

■期日：平成8年10月29～11月2日

■場所：鶴屋サテライトスタジオ

広く市民にアートボリス作品を知ってもらうため、アートボリス参加作品のパネルを展示した。

けんちく祭'96

■主催：(社)熊本県建設業協会建築部会 建伸会

■期日：平成8年11月3日

■場所：熊本城二の丸公園催し広場

こどもたちや市民に建築を理解してもらうことを目的に開催。展示部門では住環境をテーマに耐震性、バリアフリーについて来場者に説明を実施。また中央広場では日本特有の建築技法である木造軸組の組立を再現、地鎮祭、上棟もちまきなどを行った。また、工作コーナー、木造パネルなどもこどもたちの人気を呼んでいた。





国際交流デザイン展

- 主催：熊本デザイン専門学校
- 期日：平成8年11月4日～平成8年11月14日
- 場所：鶴屋サテライトスタジオ及び地下2階特設会場

国内外で建築デザイン、インテリアを学ぶ学生の作品を展示。学生達の感性溢れる作品を通して建築やアートポリスについての認知促進を図った。

松橋町・未来のまちづくりワークショップ

- 主催：松橋町、松橋町・未来のまちづくりワークショップ実行委員会
- 期日：平成8年11月16日
- 場所：宇城ショッピングプラザバルシェホール

「まちづくり教育」の手法により、松橋町の小学生を主な対象として「未来のまちづくりワークショップ」を実施。これまでおとな主体で進んできた経済効率優先のまちづくりから心の豊かさや物の大切さを見直したまちづくりへの転換を提案した。



私たちが守るべき「くまもとの自然環境」シンポジウム

- 主催：くまもと21の会
- 期日：平成8年11月20日
- 場所：熊本市国際交流会館ホール

自然と共生した快適で潤いのある生活環境づくりに向けシンポジウムを実施。2020年のくまもとをシミュレーションしながら環境保全の行動指針の方策を探った。



くまもとアートポリス'96 誘致会議

全国建築審査会長会議

- 期日：平成8年10月23日～25日
- 参加者：553人

日本建築士事務所協会全国会長会議

- 期日：平成8年11月20日～21日
- 参加者数：84人

全日本建設技術協会講習会

- 期日：平成8年11月27日～28日
- 参加者数：1259人

総

2期8年余を経過したくまもとアートポリス。

これまでに参加した50点を越えるプロジェクトを後世に残していくにはどうしたらいいか。

様々な活動により地域に根付いたまちづくり・むらづくりの火を

絶やさないためには、何をしなくてはならないのか。

くまもとアートポリス '96の最後を飾るイベント・アートポリスフォーラムでは、
今後のアートポリスの在り方、方向性が再確認された。

括

私の意見と提案

大塚 浩平
(嘉島町・日本画家)

「新しいデザイン」「斬新なもの」「新しい住み方の提案」今回頂いた資料や、実際自分の目や肌で触れ、私が一番目につき、そして気になったセンテンス。そこには、「建築」を芸術的により高い次元に持っていこうとする意図が、読み取れます。それが果たして良い意味なのか、悪い意味なのか、判断しかねる「かたち」として、それらの建築物は私たちの生活の中に映っているように感じなりません。

一般的に、「芸術」とは、何か特別なもので、それ自体に価値があるかのように謳われています。そして、そういうものを「作る」と「文化を生み出すこと」と信じているようです。が、果たして本当にそうなのでしょう？ 同じようにアートポリス事業も、その芸術的な特別なものを「作る」と、を目標してきたのではないのでしょうか？

本来、芸術的な価値とは、目的の初めにあるのではなく、結果としてそうなるものであるはず。特別なものである前に、身近なものの中から、その延長上にあるもの。それが芸術であり、「人」が関

わって初めて価値が生まれるもの。

現在、文化財として指定されている古来の建造物（寺社や教会、古墳、橋など）は、どれもその時々の人々の願いと、必要性に応じて、工夫し、創り上げられてきました。それらは社会や自然に対しての『心の表現』の結果、生まれてきたものばかりです。

私は、「ものを作ること（建築を設計すること）」「や」「文化を生み出すこと」「は、自然や人間（住み手、使い手）に対しての、『心の表現』をすることだと信じてやみません。

今回、私がモニターとして多くの建築物を見て思ったことは、○私たちが取り巻く、「器」としての空間を、どのスケールに合わせ展開していくか。

○「作り手」と「使い手」との関わり方を無視しては、何も生み出すことは出来ない、ということ。○気持ちの良い空間（建築）ほど、設計者の温かい心配りが感じられたが、逆にそうでないものには、殺伐さを感じた、ということ。例えは斬新さを際立てた、階段があまりにも多いある団地では、お

年寄りや足の不自由な人に対して、設計者はどれだけ『心の配慮』をしたのでしょうか？

これらは、コンセプト云々と言う以前の問題ではないでしょうか。

華やかに、次々と建設されて行く『新しい企画』は、本当に新しい企画なのか。その企画の陰に隠れてしまっている、本当の問題とは何なのか。もう一度、自分なりに原点に立ち、今後のアートポリスへの要望として、いくつかの提案を挙げてみたいと思います。

①畏敬の念

建築物と人との「価値ある関わり方」を提唱するうえで、最も忘れてならないもののひとつに、「自然」や、人々が長い年月護り残してきた「文化財」に対して、常に「畏敬の念」をもって接すること、を心掛けて頂きたい。全てのものとの「調和」は、ここから始まると思う。

②作者にとっては一作品／地元にとっては一生の作品

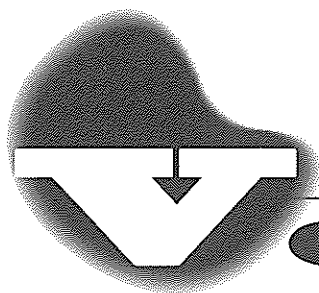
設計者本位としか思えないような建築物が多かった、と感じたのは私だけだったのでしょうか？

設計者は、建築物そのものに、作品としての価値を求めるのではなく、その作品によって芸術や文化を生み出していくという間接的な見解、「自分の作品ではなく、「地域の作品」であるという意識で制作して頂きたい。設計者にとっては一作品であつても、地元にとっては一生付き合っていかなければならない作品なのだから。

そして、その建築施設を運営する人や、利用する人達は、建物が出来たからといって、それで完成したとは思わないでほしい。建築物と地域の人々との「関わり方」で、本当の意味での完成に向けて、創意工夫し、理想的な「空間」を作り上げていくともうしたい。

③巨大化の是非





全体的に建造物が巨大化の傾向にあるのでは…。特に美術館や博物館等は規模の大きさを誇るものより、小さくても、その「質」やまわりの「環境」を含めて、ゆつくり楽しめる「空間」を考えてもらいたい。大理石で敷き詰められた、大きな吹き抜けの通路やロビーより、季節や時間や天候によって、光や風が楽しめる、木漏れ日の小道沿いに点在する、離れ「感覚の美術館や図書館があつたら、どんなに素敵だろうか。

併せて現代においては、ひとつの建築物を造るのにもエネルギー問題を無視するわけにはいかない。ランニングコスト等も含めて、設計面で、より工夫をしてほしい。いかにお金をかけなくて、素晴らしい「空間」を作り出すのか、を競って頂きたい。

④新しいのに古かった！

今回、私の見たものの中には、素材と形は新しいが、内容に新しさを感じたものはなかった。博物館にしても物産館にしても、結局、今までの形式と全く変わりはなかった。極端な言い方をすれば、プレハブが億単位の建物に代わっただけである。カタチ以上に、もっと楽しい使い方の出来る「空間」を考えてもらいたい。例えばドライブスルーで投函できる郵便局等々…。

⑤「言葉」について

美術館、図書館、物産館…。これらの「言葉」について私たちは、もう一度捉え直してみても如何なものか…。

例えば「道」は、人や車が往来するところ…人が

「道草」をくうところ。

「川」は、地表の水が、流れる水路…魚や鳥が住み、子供が遊ぶところ。

「言葉」の定義を前者のように観念的に設定して行われているのが、これまでの公共事業ではないだろうか。「言葉」の定義を、後者のように、より人の目の高さに近づけるだけで、今までは違った出発点からの発想を、期待できるのではないだろうか。

以上、五つの意見と提案を挙げてみました。どうしても「作り手」と「使い手」との隔たりを感じてしまうのは、何故でしょうか？いまひとつ、その両者とのコンセンサスが噛み合っていないのではないのでしょうか？

そこで、あらたな提案として、◎建築のプロの設計集団と、その空間を受け入れる人々を結び、双方と対等に話し合いコーディネート出来る人材の育成。

◎立案された企画を審議できる、特別委員会以外の機関の設定。又は、その（地元の人や、利用する人からの）モニタリングの制度…等々、検討の余地があるのではないのでしょうか？

他では見られない、公共的な取り組みとして脚光を浴びスタートしたアートポリス事業。これまでもたくさん、目に新しい建築物が建設され、話題を呼びました。

そしてこれからも、おそらく、この建築ブームの勢いに乗って、次々とデビューを控えている建築物の存在が、「楽しみ」でもあり、また「恐怖」でもある昨今です。

今回、モニターに参加でき、よ

り《アートポリス》を身近に観ることが出来た幸運に、感謝致します。

お題目として掲げられた「芸術」ではなく、必然性から生まれた「芸

アートポリスに参加して

落合 健二

(熊本市・無職)

今年八月、アートポリスのモニターに首尾良く参加できましたが、迂闊にも創設八年を経た今夏まで、その存在を知らぬまま多くの作品に接していたのです。「趣の異な

った建物、これ何なのだ」と、意義や目的を知らぬまま見過ごしてきました。かくして今回、初めて意識的に作品を拝見しましたが、大変感動しました。残念ながら、建築や美術に全くの門外漢である私には、作品の長所や特徴を具体的に且つ正確に述べることは不可能と言えます。

しかし、的外れを承知で若干の印象を述べますが、杖立橋や馬見原橋は、私の橋に対する考えがいかにか固定的呢かを教えてくれました。子供のようには、遠回りしてでも渡りたくなります。

建設中ですが、牛深の夕日に映える海上大橋の、手にとって触れ

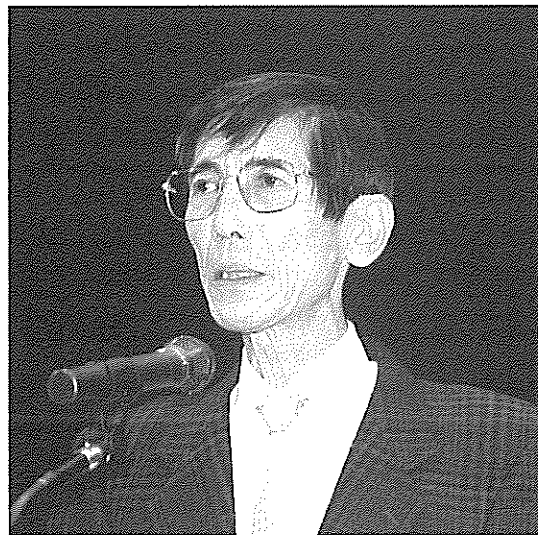
術は、「形」として、又、「精神」として、次の世代へ受け継がれ、何かを残すことに繋がっていくことだと、希望します。

るような曲線の、妖しいまでの美しさに心を奪われた一人です。

王名展望台では不可思議な空間を見ました。天空を挑発するかのような三本の柱と、大空に憧れるような、形の丸い大きな輪が絶妙なコントラストで迫ります。長い時間、座り込みました。

三角や長洲のフェリーターミナル、八代の博物館、熊本市や長洲の交番、その他私が見たものすべてから深い感銘を受けました。

一方、そこに関わる人々が何を感じているのかを知りたくて、関係者として話し込むことがありました。設計者や施工者の方々は銘記すべき事と思いますが、2、建造物の管理責任者の方に、あえて意地悪な質問や指摘を行いました。



一応の説明はなされても、民間の作品には冷淡な例が見られました。

この事業は、早期に終結するものでなく、終点のない事業ともいえます。やり方次第では、全体的な意識の変革をもたらす可能性があります。先の例は、一部のことで断定はしませんが、行政当局がこれでは県民にアートポリスへの理解を求めるのは大変だ、と懸念を感じます。残念なことです。

また、物事に「絶対」ということがない以上、この事業に疑問を呈する県民も多いはずです。大半が公共事業のため、経済的に四百五十兆円の国家的な赤字財政、世界的に高価格の我が国の土地や建設費、更に建造物に芸術性を付加したが為のコスト高など、不要不急な物と映るのは当然ともいえます。十分論理的であり、納得性のある意見だと思っています。

しかし、芸術性の乏しい人間社会は、実に寒々とした空虚な社会であることも、容易に想像できます。能を舞い、詩を詠み、花を愛で、四季の移り変わりを敏感にとらえる感受性豊かな日本人です。時間は要しても、アートポリスのポリシーや将来的ビジョンの理解と納得を得ることは、可能と信じます。

ほとんどの日本人が志を捨て、開発と環境破壊を繰り返して、金や物に埋没してしまったバブル期は、いくつもの教訓を残して崩壊しました。残された諸問題を解決しつつ、金と実用一点張りの時代に終わりを告げ、自然や身障者にも高齢者にも配慮した、そして明日を

担う子供たちが、心豊かな真の国に育つ環境を整えるべきです。それを具体化する方策として、アートポリスの推進も重要なファクターの一つに位置づけられると思います。また清和村の文楽館に見られるように、住民参加型の建造物など、元気を失った日本国内に限らず、世界各地に情報を発信してしるべき、ユニークな事業

だとも思います。二十一世紀は、更なる価値観の多様化や、個の確立と多面化が予想されます。より以上の、きめ細かな対応が求められる新世紀は、そこに迫っています。その時期、疲れた心をいやす優れた作品が、各所に多数存在していることを期待しています。

くまもとアート・ポリスモニターとしての活動を振り返って

横田 直子

(熊本市・学生)

今回、くまもとアートポリス96のモニターとして参加するに当たり、どのような視点でアートポリスを見ていくか大変悩みました。そこで、熊本にきて一番はじめにすごいなあと感じたことを思いだしました。それは「熊本の一番の繁華街から熊本城が見える」ということでした。また、熊本の都市計画のことを勉強していくうちに、熊本城がどれだけ熊本の文化や都市計画や様々なことに影響を及ぼしているかということにさらに私は驚きました。地元出身の

同級生たちはそのような私の反応に「そんなこと考えたこともなかった」といつて考えこんでしまいました。ずっと見慣れていると、または生まれたときからずっとあると、あることが当たり前のようにな気になってしまいます。

私は、山口県の宇部市の出身です。宇部市は、今回のフェアレイル川展で彫刻の町として紹介されていました。地元にいる頃は、彫刻がまちにあるのは私にとって当たり前のことだったので、アートポリスの展示の一部として紹介さ

死に弁明と改造についての考えを述べておられました。気の毒なことを言ってしまった、という気持ちもありましたが、この一体感是非常に好感が持てます。設計の段階から参加されているようで、こよなく建物を愛し、多くの方々が見てほしい、と並々ならぬ意欲と積極性を感じられます。物産館など、そこに働く地元のパートの女性、職場環境や客の状況を説明するときに誇らしげでした。「ここは私たちの職場です・・・我々の建物です」とその眼は雄弁に物語っています。

たまに、市町村庁舎の観光課へ寄りました。場所を聞くためですが、本来の目的は、担当職員のアートポリスへの関心度を知るためです。総じて、人口の少ない村ほど職員の意識度は高く、懇切な説明がありました。一方、都市化するほど義務的な説明に終わる傾向にあり、特に公共事業については

れていて本当に驚きました。でも、よく考えると、幼い頃、公園の芝生の広場にある大きな鉄の彫刻によじ登ったりして遊んでいたなあ、と結構まち中の彫刻が別の思い出と一緒に印象に残っているのです。もしあの彫刻がなくなるといふことがあればそれはとても寂しいことだと思えます。そのことを今回、宇部市が紹介されたときに感じました。

そのように、そのまちにずっといる人は気づかない、またはまちの人しか知らない「まちの魅力、まちの宝物」をアートポリスは探すため、またはよその人に指摘してもらうため、そしてそれを形にするための事業だと私は今回いろいろなイベントに参加して思いました。ここでいうよそからきた人とは今のところ、各プロジェクトに関係している建築家ですが、もつと様々な人を巻き込んだ方がいいと思います。それはアートポリスは「ひとづくり」でもあると思うからです。そのように考えるとふと疑問に思うことがあります。何故建物と同じように人も表彰してあげないのですか？

表彰は誉めてあげるということ以上に他の人々の参加も促すことにつながると思います。

「まちづくりをしよう、なにかしよう」という人たちにこのような形でがんばっている人たちがいますという風に紹介する。他のまちの人から相談を受ける。アートポリスの建築家から学んだことを今度はその地域にいる人が広める、学んだことをきつかけにもっと違う方法を生み出していく。このよ

うなことを続けていくことも必要だと思えます。

また「建築に携わっていないくてもまちづくりに参加している人たちはたくさんいます。自分にできる身近ななたちで参加してみませんか」という問いかけになると思えます。器づくりだけがまちづくりではないと思います。まちづくりの盛んなところは、人が元気でした。清和文楽館のとてもお話の上手な兼瀬支配人さん、伊東豊雄さんまでもまちづくりに引っぱり込んだ八代の本町商店街の人たちや杖立橋のPホールの元気なお姉さんたちも…。

熊本のまちづくりからさわやかなイメージを受けるのはこのような人々の参加もあるからだと思えます。今回のアートポリスの展覧会や資料にそのようなまちの人々の顔や声が紹介されたらと思えます。

「都市にデザインを、田園にアイデアを」というキャッチフレーズのように、くまもとアートポリスは2つの地域を扱っているような気がします。都心部と田園が全くアプローチの仕方が異なっていると思えます。田園の場合は先に挙げたように一つの建物の計画がそのまち全体を変えていく仕掛けとなつていますが、都心部では人々の生活を変えてしまうことを提案しているように思えます。都心部で生活していて、ときどき田舎に行くと人々の生活が豊かに見えるし、まいます。都心部の住まいは仮の住まいだからあまりこだわらないという考え方が都心部の生活を貧困にしているのかもしれない。

仮の住まいだつて贅沢にもっとこだわりのをもとう！というのがアートポリスの考え方のように思えます。

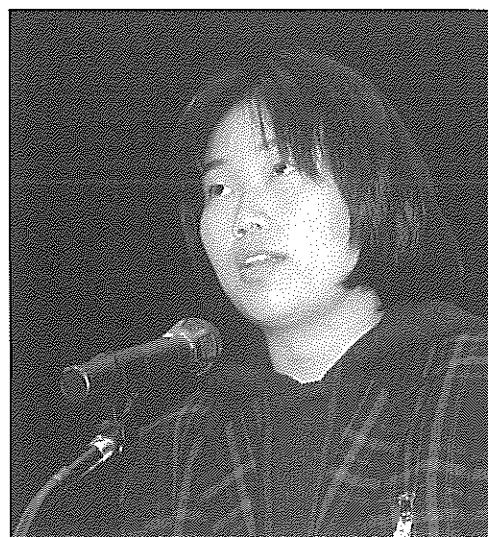
費用は実際の公共事業とあまり変わらないのだから、贅沢というのはきつと「心の贅沢」だと思われませんが、この心の贅沢を

竜蛇平団地の夏祭りの露店の手伝いをしたときに感じました。子供たちが一生懸命演奏しているのを親たちばかりでなく、近所のおばあちゃんたちも見に来て声援を送っていました。演奏が終わった後は、子供たちよりもお母さんたちが大喜びで、子供のコミュニケーションがきっかけになつて親同士の交流も始まった、という感じが受けられました。このお祭りもアートポリスの関連イベントでしたが、あのお祭り後の住民の人たちのいきいきした顔を見ているとこれから先もずっと続けられそうな気がしました。きつとお祭りをきつかけにして友達も増えたかも知れません。

「あのおばあちゃん、今部屋で寝込んで出て来れないから、この焼き鳥を持って行ってあげよう」というようなことは、このお祭りの勢いだからできたのかも知れません。アートポリスの参加施設であるという、あまり住民の人には興味のないことがきっかけになつ

て集まって住んでいるということ初めてポジティブに考えられたのではないのでしょうか。

熊本は熊本城の石垣、阿蘇の雄大な自然と「力強い」要素がたくさんあります。都会からそのまま文化を持ってくるのではなく、都会の感覚も持ち込んで熊本の素材でもつと熊本の宝物を見つけたり、地域の問題を解決する事を考えた方がいいと思えます。ファール立川の北川フラムさんの講演のときにファール立川をそのまま熊本に持つてこられたら嫌だなと思えました。その反面、上通りの九電跡地に置かれたあのドラム缶は迫力があつて熊本らしさを感じました。そのように「これはいいけど、これは嫌」といえるようないろいろな選択肢を地域の人たちにも紹介してあげるといふ意味でアートポリスはもつと多くの地域にも紹介され、もつと多くの住民たちの参加ができるようになればと思えます。



Kumamoto International Exhibition of Architecture
Kumamoto Artpolis '96

Artpolis Forum

とき／平成8年11月30日 14:00～16:30 ところ／熊本県立劇場

私たちにとってのアートポリス

ゲストスピーカー

●
久野 啓介

(熊本日日新聞社論説委員長)

●
滝 悦子

(エッセイスト)

●
島田 満子

(造形作家・パブリックアート)

●
西嶋 公一

(オフィス・ムジカ代表)

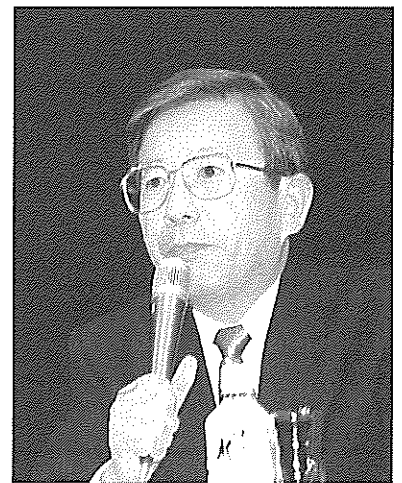
コーディネーター

●
堀内 清治

(「アートポリスを考える会」顧問)



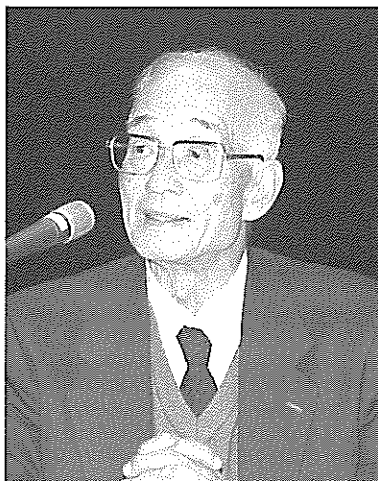
滝悦子



久野啓介



西嶋公一



堀内清治



島田満子

アートポリスは 新しい風景を作る 運動なんですね

堀内●くまもとアートポリスは、1988年に発足以来、約55件の建造物を造っています。日本建築学会賞を4度も受賞しておりますし、我々が期待した通り、これらの建物を地域おこしの起爆剤にして立派に成功を収められている市町村もご紹介します。アートポリスは、いわば国内、国外に開かれた熊本の窓として、あるいは顔として、今や熊本県の文化的ステータスは確立されたと考えていいのではないかと思います。一方、アートポリスに対しては、これまで地元ジャーナリストを中心に、賛否両論のいろいろな批評があったことも事実です。

本日は、第二回目の熊本建築展である「くまもとアートポリス'96」の閉幕を迎えるに当たりまして、改めて、アートポリスとは、一体我々にとってどういうものであるのか、あるいはどういう意味を持っているのかというのを、成果と反省を踏まえながら、これからパネリストの方々に縦横に論じていただきたいと思います。まず、久野さんからご発言をお願いします。

久野●2、3アートポリスについて考えていることを申し上げたいと思います。私はアートポリスは

一つの文化運動であると考えております。新しい風景を作る運動と考えております。風景というのは人間が作ってきたと言ったのは民俗学者の柳田国男ですが、私たちは戦後久しく、ろくな風景を持つことが出来なかったという思いが強く、それは我々が持った文明の質によるのかもしれないけれど、直接的には、その責任の一端はやはり土木、あるいは建築にあるということも言いたいのです。今こそ、未来に向けて、私たちは自分たちの新しい風景を持たねばならない、持ちたいということを全国に先駆けて訴え、そして、行動を始めたのがアートポリスではないかと考えております。

第1期の成果は、磯崎コミッションの「国際的評価を受ける建築デザインが作られなければならない」という言葉に象徴されると思います。実際に大変高い評価を受け、建築界では熊本は大変有名になったわけです。その事自体が一つの成果だとも思いますけど、私はむしろこのアートポリスの運動が、課題として世界に通じるものがあつたということが大きいのではないかと思います。今日、こういう運動を進めるに当たっては、課題として、世界に通ずると言うことが不可欠であると考えからず。

そういう成果の一方で、アートポリスはいろんな摩擦を生み出したことも事実です。県営保田窪第一団地がよく例に言われます。住民からいろんな苦情が出たりして、新聞にも書き立てられましたけど、それはそれで良かったんじゃない

かと思っております。摩擦が会話を生み、それが理解を深めていくことになったんじゃないかと。元々、運動というものはそういうものだと思います。

第2期に入りまして、いろんな様変わりが見えてきました。一つには、第1期の時には建築家の方々の間で、大変評判になりましたけれども、一般住民の間ではそれほどでもなかったものが、地域によつてはアートポリスを核としたまちづくり、むしろおこしが活発になってきて、例えば、清和村とか泉村、山鹿市などで地域活性化の試みがアピールされてきて、これは新しいアートポリスの展開だったと思います。

それから、シンポジウムの中でも、第1期にはなかったいくつかの特色が表れてきていると思います。その第1はコミッションが提案したネットワーク型の展開です。従来のマスタープラン型の都市づくりではなく、個々に造っていくながら、結果として網の目のようにネットワークを組んでいくという新しい運動の方式を提示されたことです。

2番目には第1期の国際的評価とは対照的な土着主義が強く出てきたのではないかと思います。第3に建築以外のジャンルとの交流による建築の場のリフレッシュが行われたこと。パブリックアートが一つの焦点になりました。第1のネットワーク型、展開の有効性は大変難しい問題で、我々素人には手に負えないところもあります。2番目の土着嗜好というのは、私は、大変関心を持ちました。杖

立橋を造られた新井清一さんは、5年間に亘って、地元に通って地元住民との話合いの中からデザインを作っていくかたそうです。

「アートポリスデモクラシー」という言葉を言っておられました。それから牛深の海彩館を作られた内藤廣さんも、建築家が地域にどういふふうに関与できるのかを考えられた末、ああいうものになっていったということで、大変、建築家の中で住民本位の姿勢が強く出てきたと感じました。ただ、それは住民の声を聞くだけではなく、建築家自身が深く地域の中に入り込んでいく中で、その土地の持っている潜在的な可能性を引き出してきている。それでもってデザインを作っていくということであつたんじゃないかと思えます。シンポジウムの最後のまとめをされた八束はじめさんが「土地の精霊に耳を傾ける」ところがアートポリスの一つの特色になってきたと言われたわけでありまして、これなどは新しい風景を作るということはどういうことなのかというのを考える時に、一つのキーワードに達してきたんじゃないのかと考えたわけです。この数カ月間にわたって展開された、今回のイベントを反芻することで、自ずから3期以降のアートポリスの在り方というのは見えてくるのではなからうかと考えています。

堀内●ありがとうございます。次に、滝さんをお願いしたいと思います。滝さんは博多でいろいろな活動をしていらつしやいますが、熊本以外から見たアートポリスについてご発言をしていただければと思います。

よそにはない壮大なプロジェクト とても羨ましいですね

滝●先程、3人のモニターの方の発表を、なるほどなとそれぞれに共感を覚えながら、羨ましく伺っていました。と言うのも、博多にはこのような壮大なプロジェクトはないんですね。福岡はそれぞれの企業が勝手に建てまくりまして、まさに秩序のない状態になっております。それが元氣な印と言うことで、全国的に元氣のある町と言われております。三日くらい前に椎名誠さんにお会いしたら、福岡だけ空港に降りた時の風の吹き方が違うって言うんですね。つまり、福岡という無秩序な町に住んでおりますと、熊本の方々の努力と言いますか、こんなふうの一つのプロジェクトに立ち向かっておられる姿に羨ましくも思え、同時に、大変感動したわけです。

4年くらい前、伊東豊雄さんと福岡でお会いした時、「僕は今度八代で造るんだ」と、非常にエネルギーを燃やしておられました。その頃からアートポリスのことを伺ってましたし、私自身、建築とか美術に大変興味があるものですから、ずっと興味を持ってたんです。福岡で建築に携わったり、興味を持っている方は、アートポリ

家の条件の1つは「必ず、何回か結婚をしなければならん」と。フランク・ロイド・ライトも磯崎先生もそうですね。だから九大のその先生は大変驚められたわけです。次に「一度も雨漏りのしない建築物を建てたというのは2流である」と。様々な突き上げを受けて、試練を受けて初めて一流、世界的な建築家になるんだそうです。アートポリスに参加された建築家の方

この8年間 アートポリスは個人的な体験の 積み重ねだったのかなあ

西嶋●いつの間にか8年たったわけですけど、最初の頃は確かに批判の方が流行るっていうか、「何でああいうことを始めたんだ」とか、「いくら懸かってるんだ」とみたいな話がわーっと広がった様な感じでした。私にとつてのアートポリスは何だったんだろうと振り返ったときに、それは個人的な体験の積み重ねだったのかなと思います。私は建築デザイナーでも施行業者でもありませんが、八代の消防署、これは参加プロジェクトではないんですが、友人たちとふらっと建物を見ようと5、6人で

は、複数の結婚をなさなくても、試練はもう十分お受けになったんじゃないかなと考えた次第でございます。堀内●どうもありがとうございます。熊本のことを手放しで誉めていただいて恐縮します。福岡は大変熱気があってうらやましいと思っております。続きまして、西嶋さんをお願いします。

アポイントなしで行ったことがあります。私の消防署というイメージは、非常にお堅いところで、約束なしに中を見せて下さいと言っても当然断られるだろうと思っていたわけですが、中を案内しますとおっしゃる。そして、消防署の職員の方の案内がすごくスマートなんです。いろいろお聞きしたら、県内はもちろん福岡、東京、外国からも、いろんな方がお見えになるんだそうです。これは僕の個人的な体験ですけど、アートポリス推進の運動の中で、生まれた一つの変化だと思うんですね。多

分こういうことは、アートポリスがなかったら、僕は体験できなかったと思うんです。

もう一つは4年前のことですが、磯崎さんたちのお話を聞いてタクシーに乗ったら、タクシートの運転手さんが「お客さん、今アートポリスばどがん思いはつですか？」って運転手さんがおっしゃるわけですね。その運転手さんは保田窪団地にお住まいの方なんです。

で、とにかく不満だらけだと。デザイナーに会わせろ、と。どういう考えで、こんな使いにくい建物を造ったのか、その責任者に会わせろ、と県庁に言うけどなかなか会わせてくれない。すったもんだをやった結果、デザイナーに会わされたそうです。それで、やはり人と人が会って「まあ、分かった。そういう考えの建物もあるだろう。

だけ、もうちょっと早う会わせてもらったら、私もあが、あはれんで良かったとですよ」と、おっしゃるんですよ。それも、アートポリスにとつての貴重な体験だと思っています。自分が住む団地のデザイナーと会って意見を交換するということは今までなかったわけですね。そういう個人的な体験の積み重ねというのが、やはり、私たちにとつてのアートポリスの意義というか、専門家の方は専門家の方で、いろんな驚きとか、見解があったと思うんですよ。私たちにとつて、周りにそういう建物とか、そういうサービスが提供されるということが、やはり町を面白くすることでしょうし、そういうことは、なかなか4年や8年では広がらないと思います。最初

のアートポリスの建物が、朽ち果てるくらいの時になった時にシンポジウムすると、この会場が満席になって行列が出来るようになると思うんですよ。そのくらい続いているかなきゃいけないものだと思います。

堀内●どうもありがとうございます

アートをプランの段階で入れると町がもっと楽しくなると思うのです

した。最後に、島田さん、お願いします。島田さんは、パブリックアートをやってらっしゃる方です。

島田●私は建築の専門ではないのですが、建物には非常に興味がありまして、日本建築美術工芸協会にも入っています。アートポリスの建物のデザインは、斬新で、全部とは言いませんけど、素晴らしいと思います。しかし、建物のデザインだけで、周辺環境のデザインまでは、アートポリスに入っていないように思えます。今後のアートポリスの課題としては、パブリックな場所にインパクトを与えたり、空間を演出したり、それから、建物とアートの調和で、都市空間を個性的なものにしていけたらと思います。熊本は象徴的に城がありますけど、お城の周りには歴史とか、風土から来た歴史、またそういうものから来た造形や彫刻があっても良いと思います。

だからと言って、加藤清正の烏帽子だけを造形にしようというのではなくて、もっと自由な発想でアートポリスの建物と合うようにすれば、個性的な熊本のアートポリスが個性的な都市空間に変わっていくのではないかと考えているところです。パブリックアートを最初から計画の中に入れてまちづくりをされると、もっと町が楽しく親しみのあるものになると思います。今、唐突に町の中に斬新なデザインがぽつと出てきているように思われるけれども、もっと横の広がりというものが出てくれば良いと思います。造形作家として、ここにこういう物があれば親しみのある空間になるんだがなど、そういうふうに思っている建物を見て回っています。

滝●作った後で何か作れと言われたって。もっと早く言つてよいということですよ。

島田●プランの段階から入らないと、とつてつけたような作品になつてしまいがちなんです。限られた条件の中で、うまく作れる人は良いですよ。堀内先生もおっしゃいましたけど、機能が構造的にちゃんとしていない建物は、良くないと。機能がある程度大部分を占めて、それにデザインが入るんです。ファインアートと言うものは、自分の考え方や個性を出すのであって、所詮建築家の人とは合わないんです。いろんな条件をクリアして、デッドスペースも活かすくらいの力がないとアーティストとしてはいけないと思います。

西嶋●それはやはり施主に問題もあるんです。施主が、最初に建築デザイナーと施行業者だけ決めてどんどん進み出してから、あそこが空いてるから、何か誰か作つてくれる人おらんですか？言われたら困るわけでしょう？

だから、そういう意味で県民が施主の一員であるし、民間で建てれば、民間のオーナーが施主ですよ、ね、その啓蒙が必要ですよ。どうせ造るんだつたら、最初から考えましようよ、と。すると、もっと良いものが出来ますよって。でも、こういう運動が起きていることで、皆さん、だんだん分かってこれたと思います。

土着性って、その土地の潜在的なものを掘り起こしていくことなんです

堀内●皆さんそれぞれ、大変面白いお話をありがとうございました。

ところで、一番始めに久野さんが、第2期になってアートポリスは「土着嗜好が目立ってきたと話されました。」土着嗜好」というのはいろいろと誤解を招きやすい言葉のようにも思います。滝さん、博多における土着性と、熊本における土着性が違ってるのか、似たところがあるのか、いかがでしょう。

滝●まず連想するのは、博多だろうが、熊本だろうが、鹿児島だろうが宮崎だろうが、その町らしさ、村らしさと言うとなぜか太鼓が出て来るんですね、あれはどういう心理なのでしょう。それに、パブリックな建物に手を加えようとすると、必ず交番かトイレなんですね。普通のもので良いんじゃないって感じがするんですけど。私は関東、関西からお見えになった方に、「あなたたちは、九州に来たと思っただけじゃない。外国に来たと思っただけじゃない。外国に違いますから」と申し上げるんです。福岡に屋台があることで分かるように、あの辺の人々というのは元海賊で、ちよつと漕いでたらしい、上海まで行ってしまったとか、オオボラ吹きが多いんです。

それで芸能人が輩出しているわけなんです。

「おそらく福岡は、やや、衛生観念と貞操観念に欠けるんじゃないか」と言うのと、関東、関西の人は大喜びして「今度単身赴任してきます」と。(笑)

つまり、福岡をそういう風に評価しています。片や熊本は、非常に質実剛健というか、スクエアな町だなあと思っています。それは、やはりお城に象徴される歴史とか伝統とか、そういうものを大事になさる風土性というか県民性をお持ちで。福岡と熊本は同じ土俵では戦えない。福岡の方が負けてると。団結心もあまりないんですよ。

西嶋●熊本もよく団結心がないって言われます。どこも同じじゃないですか。ただ、これだけのものが出来たということは、団結心の現れですよ。

滝●そうそう、私何度も言うけど、ホント羨ましい。そして相当お金が懸かったと言うと、建築総予算のたった1%ですって？ びっくりしました。私もっとお金がかかったんだろと思っただけですが。建築家の方々の試練の一部というのは、建築デザイン費が少なかった、値切ったんじゃないですか？

その辺で泣いてるんじゃないですか。それほど低予算で、今後もちろんお続けになるんでしょうから、一般の方々も巻き込んで、文化活動の環を広げたという意味で、こんなに安くて、こんなに意義ある活動はないですよ。何遍も言うけど、羨ましいですよ。

西嶋●土着性の話に戻りますが、「アートポリスでどういう建物が好きですか」と質問すると、「清和の文楽館とか、県立美術館、八代のミュージアム」という答えが帰ってきます。自分たちのいる風景の中に、非常にしっくりきているもの、それでかつ、美術や文楽が上演されて、普段の生活の中でほっと出来る空間や、サービスが提供されるものが評価をされてきているように思います。今日のアートポリスモニターの方の文章の中にありましたけれども、文楽館が出来たことによっておみやげが欲しい、それで物産館が出来て、地域のもので再評価されるという連鎖的な変化と言うんですか、それが風土とどういうふうに絡み合っている、醸し出されていくかということが、非常にその地域に住む人たちにとって、強いインパクトと言うか、町が元気になる、一つのエネルギーみたいなものに感じ

られて、それが一つの成功となつてきている様な気がしますけどね。

久野●先程から、熊本城の素晴らしさが繰り返して言われております。

ただ、常日頃感じるのは、熊本城が余りにも素晴らしすぎるために町の方がかすんでしまつてるとずつと思つておりました。それを一つ逆転したのが県立美術館の分館ではないかと。あれが建つた時にそう思いました。対照的でありながら、今までになかった調和をお城とまちとの間に作ってくれて、そのために、熊本の風景が一変したのではないかと私は思いました。先程言いました、新しい風景を作るといふことはそういうことではないのかなあと 생각합니다。今まで埋もれていた風景がそこに見えてきたと。

八代の伊東豊雄さんの建物も、大変素晴らしいと思いますけど、最初の博物館が出来たときに、あれが八代的かと言うと、必ずしもそうではなかったと思います。あいう造形は八代にはなかったと思います。けれどもだんだん馴染んできますと、いかにも八代だなあという感じがして参ります。それをもっと痛切に感じさせられたのが、消防署の建物です。あれはアートポリスの参加作品ではありませんけども、アートポリス推進賞に選ばれた作品です。八代は、中世以来大変進取の気性に富んだところでありまして、そういう風土を実感させてくれ、ホントにすごいもんだなと思いました。

「土着性」ということを私が言う場合は、必ずしもその土地に元々在った造形を再現するということ

ではなく、潜在性なものを掘り起こしていくということを含めて考えたわけでございます。

堀内●県立美術館なり、八代の伊東豊雄さんの建物が土着的でなかったから成功したという皮肉な言い方も出来るんじゃないでしょうか。

久野●そうではないと思います。土地の持つている可能性というのは必ずしも、表れているわけではないのではないかと。やはり発見しなければ、表れてこないものがある。土着嗜好というのはそこまで含めたかたちで、発言したつもりです。

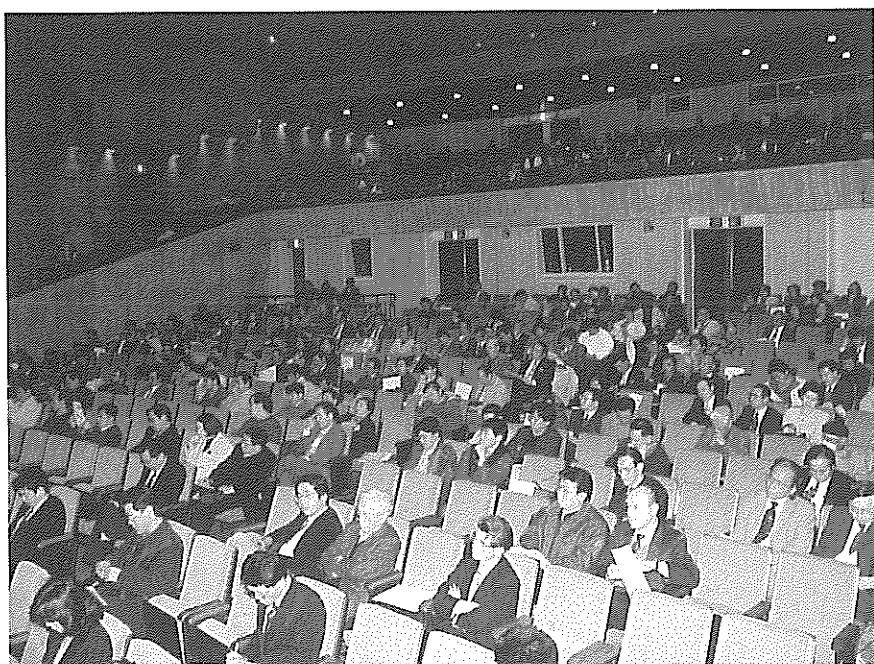
滝●日本人には、元々土着という概念がないんじゃないかと思うんですよ。日光の東照宮が建つた時は、実に奇怪で、何でこんなものがあるのっていうほど真つ赤だったと思うんですよ。「何でこんなものが、おらが土地に出来たんだ？」みたいな。おそらく、周囲の人は怒つたと思いますね。ところが、時代と言うものは面白いもので300年、400年経つと、観光名所になつていくわけですね。土着の捉え方もありますけど、木が採れるから木でいっぱい造つとけみたいなのはどうもね。日本全国木があるからと言って、全部木造つてもつまらない景観だと私は思います。いろいろあつても良いんじゃないかというのが私の考え方です。土着と言う嗜好は時を経てば、生まれて来るんじゃないかと思ひます。例えば、カフェバーが残らなくて、提灯の居酒屋が残るのはどういふことかと……

西嶋●カフェバーが出来るといふなって、そういう匂いのするところ

ろにカフェバーを作ると繁盛するし、みんな喜ぶと思うんです。土着になり得るかと言うのは、匂いみたいなものがあると。伊東豊雄さんはかなり通われて、そういう匂いを嗅ぎ取られ、それが形になったと。そういうことかなと思います。

滝●造り手の魂が入っているものは土着になりやすい？

西嶋●極端に言えば「頼まれても匂いが嗅げなかったら、私は建物を作りません」と言うアーティストも当然いるべきだと思うし、そのくらいの信念で仕事してもらいたいですね。



施主である地域住民の関心を喚起する活動があつていいのではないだろうか

堀内●では、この辺で、今後アートボリスはどういう風に進んでいくべきだろうか、今後アートボリスに望むことというテーマで、ご発言をお願いしたいと思います。

西嶋●今年はホントにいろんなイベントが行われましたね。幅広い方々に知ってもらふ手法として取り入れられるんじゃないけども、全部見てみると、このイベントは建築とどう関係があるのかなというのもありました。そのものは非常に面白いイベントだったんですけどね。ちよつと、たくさん手を広げすぎたのかなと。そう言う意味では、初心に立ち返って、建築、それから発するパブリックなものへの関心ということで、それを究めていかれるべきじゃないかなと感じました。私は設計者でも施工業者でもないけど、施主の一人ではあるわけですね。県や市が建物を造れば、その施主の何十万人、何百万人の一人で、たまたま県庁や市町の担当の方々がデザイナーやアーティスト、施工業者を決めていくわけですが、私たちが施主であり得るということにおいて、と思います。ただ単に、アートボリスのプロジェクトで建物

が造られていくんじゃないで、アートボリスのチームが、施主である地域住民が何を望んでいるのかという観点で関わっても良いでしょう。建物をたくさん造ることがアートボリスじゃないと思います。古くからある建物をいかに再活性させるかということも、一つのテーマとして考えられても良いんじゃない。県や市の建物を通してだけじゃなくて、自分の家とか会社とか、所属している団体が建物を建てますね、そういうときも施主の一員であるわけですね。これから、民間もこの運動に参加できるようにな仕組みを作ってもっと壮大に、面白くしていただきたいなと思っております。

堀内●どうもありがとうございます。民間に参加してもらえるよう考えるべきではないかと、ごもつともだと思ひますが、島田さん反論があるのかと思ひますが。

島田●そういう面もあるかと思いますが、全体として見れば、広がっていくのが当然だと思います。パネラーとしての立場から言いますと、それこそ、建物を核として周りの風景を考えていくべきだと思うんです。パブリックアートは野

外彫刻だけではないんです。ストリートファニチャーと言って、看板、ゴミ箱、水飲み場、ベンチ、そういうものも全部をアートボリス事業にふさわしいものに入れていかないと、町全体がせっかくアートボリスという事業をしても、唐突にデザインの良いのがあつても、全体が良くなるわけではないので、手を広げるという意味ではなくて、これを核にして周辺整備の方も一緒に考えていくのが、これからのアートボリスの方向ではないかと私は思います。

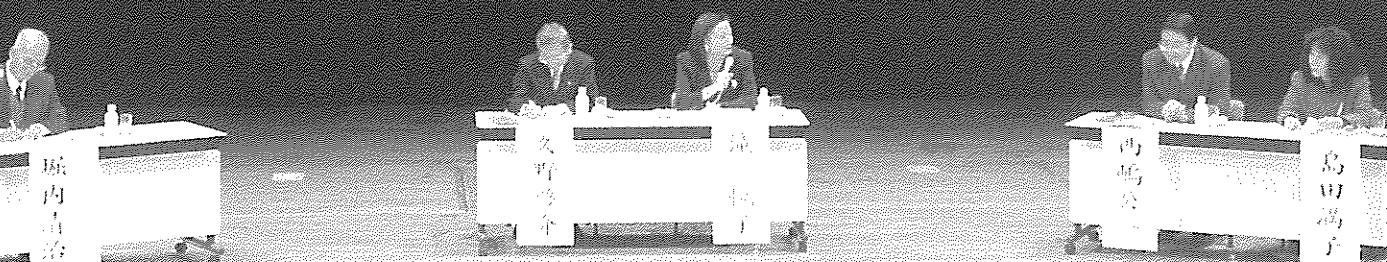
滝●島田さんがおっしゃることに、すごく共感するんですよ。と言うのが、さっき、久野さんがおっしゃった2つのケース。私も、その2つが好きなんです。この共通性は何かと言いますと、周辺が良いんですよ。こんもりとした森があるとか、八代の場合は、前庭を作って無駄な部分がある、豊かな建築であるということですね。それに引き替え、町中に、アートボリスが突如建つてくけど、すぐ横には小汚い建物が建つてるとか、あるいは電線が道の真ん中を通っているとかいうような、島田さんが言う周辺整備という問題ですね。

Artpolis Forum

アートポリスというのは、ファッションで言えばボタンの色は何にするとか、ブローチは何にするとか、首飾りはどうする、耳環は？鼻輪は？みたいな大変ディテールの問題で、全体の洋服の色はなんだか分からないという感じの話かもしれません。ですから、日本画家の方がおっしゃっていましたけど、造ってお終いということではなくて、むしろ、今日からスタートよと言ってもいいんじゃない？私が一番に言いたいのは、メンテナンスの問題です。そこら辺のお掃除というのをどういうふうにしていけるのかなと言うようなことが気になりますけど。

久野●私も問題の一つだろうと思っております。10年になると今までやってきたことを総点検しなくてはならないような、そんな時期かと思えます。中には当然メンテナンスがうまくいってないケースもあるだろうし、また十分に活用されていないものもあるんじゃないかと思えます。もつと言うならば、これはもうだめだというものもあるかもしれない。そういうものをどうするかということにも取り組んでいかなきゃならない時期になってくるのかなと感じております。

KAP 熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」
アートポリスフォーラム
テーマ◆「私たちにとってのアートポリス」 主催◆熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会



住民が建物に合わせるくらいの気概がないと アートボリスは成功しないかもしれませんね

滝●私、FM福岡をやってるんですけど、黒川紀章大先生にインタビューしたんです。「黒川先生でも、これは建てそこなったなあというのがあるでしょう？」と水を向けたら、「いっぱいあるよ、出来たら夜中にダイナマイトで爆破してしまいたいのが全国ここかしこにある」と。実に素直な方だなと思いました。それから、他にも世界的に有名な建築家の方がおっしゃるのは、建築は一朝一夕にしては出来ないということです。チームプレイなんです。自分のデザインをいかに良く具現化してくれる職人、大工さん、左官さんとか、畳職人とか、そういう人の層の厚さが要求されるんです。

もう一つ住宅に関しては、住んでる人も協力しないといけないと思うんです。むしろ「こんな使い勝手の悪い家に住んでる」、というのは贅沢だと思ふの。多少の不便さは我慢せないかと。日本国の百年、二百年の経緯を思うと、日光東照宮に我慢した住民のごとく。自分のサイズを建物に合わせるというくらいの気概を持って協力しないと、こういうアートボリスというようなプロジェクトは成

功しないと思うんです。福岡でも福岡地所というところが、ネクサスを香椎に造ったんです。アートボリスで斬新な県営住宅がありましたね、あのような建物を一カ所にたくさん建てたのです。それは大変注目を浴びました。それがまた住んでる人が感心なんです。はつきり言って、交通も不便だし、日本家屋に慣れた人にとっては戸惑うことが多いんです。けれども、その町内会報に、「でも、僕たちはアートと言うものを成功させるために協力します」と、書いてあったんです。「住んでる人が不便だと言って抗議するのは簡単なんですけども、他の都市から見に来てる人も多いし、それを成功事例にしたいから、多少の不便は我慢します。」住めば都「と日本の諺にもありますけど、そのように、だんだん慣れてきますよ」と書いてあるわけです。熊本の人もそのくらいせんといかんじゃないですか。文句ばかり言ったらいかんと思います。

西嶋●ちよつと反論していいですか。公営住宅に住むんだったら、熊本へ行こうキャンペーンというのを友達と話したんです。というのは1回目、2回目は色々問題あったみたいですけど、「どういうコンセプトで、どういうデザインがどういう間取りに作ってる公営住宅ですよ」という、そういう情報を公開するというか、選択肢があると、選んだ中で面白く使うことができると思います。例えば長期に予算組みして、「5棟一緒に建てるけど、5棟全部違います。好きなところにくじを引きに行つて下さい」と。そういう仕組みも作れるんじゃないかと思っています。例えば、団地や学校で、ああいうユニークなものが出来てくるという背景には現場の方々は非常な規制の抵抗があつて、新しい取り組みを一番ガチガチのお役所でやってるわけですよ。ある種規制緩和の一端をアートボリスはいっているんじゃないかなと僕は受け止めているんです。だから、ユーザーのニーズはどこにあるんだという風に、それをうまく面白く使える様な気がするんですよ。

堀内●先程、滝さんから職人の話や博多でアートのために協力するという住民がおられるという話があつて、大変面白い話と思つて伺つておりました。その前に西嶋さ

んから、もっと一般の市民にもアートポリスに参加してもらいうようなことを考えたかどうかという話もありました。家を設計するのは建築家かもしれませんが、実際建てるのは、職人の方がお造りになるわけでして、非常に大きな問題だと考えております。日本では伝統技術が衰退していつて後継者がいないという状況になっている。そういう日本の伝統技術の問題、職人の問題とからめてアートポリスをどう考えていったら良いのか。それからアートポリスを建築造りということではなくて、もうちょっと範囲を広げ、パブリックアートにも広げ、あるいはまちづくりにも広げて考えていくべきだという話もありました。

滝●民間も作らせてくれと名乗りをあげてもいいということを、初めて知りました。そういうことをPRなさっているんでしょうか。どのような形でも一つの課題だと思いますが、こういう素晴らしい建築デザイナーを知っているから、この人を登用したらどうかとか、個人でも推薦できるような窓口を作ることが先決だと思うんです。どうぞ参加して一緒に語りましょうというムード作りが必要と思うんですけど。

久野●建築家の方に、ユーザーあるいは一般市民の声を聞いて欲しいと、先程から出ていました。それと同時に市民の方も、アートポリスとは何か、建築とは何かということをもっと考える機会にも、アートポリスはなつていかなければという気も致します。

デザインか機能かという問題の

立て方はおかしいんだと、専門家の方はおっしゃいますけど、私なんか素人はやはり、これは一つのテーマだと思わなければ。どちらを取るかということではなしに、その2つのテーマがあるということとが面白いところだと思っています。これは工芸の分野でも、用と美があるわけです。建築にもそういう部門があるんじゃないかと。暮らしの器である。利便性とは全然違った所から生まれるオブジェ的な表現が人間の暮らしにどういう意味合いを持つているかということは、そう簡単なことではないでしょう。しかし、それを実際にやっていくのが建築ではないかと思っておりますし、アートポリスの場合には、かなり実験的と思われるような鮮烈な形で出されていて、その辺の面白さは、私たちも勉強していかなければならないんじゃないかなと思っています。

それから、今後のアートポリスを考えていく場合に、県主導のアートポリスの是非があらうかと思えます。これを一つの運動と考えるならば、本来は民間主導の運動が本当だろうと思います。ただ、これだけ大きなプロジェクトを長期間続けていくとなると、とても民間では支えきれないと言う部分があります。やはり、今まで通り、県の全面的な支援をお願いしたいと思います。また、市町村も取り組んでいただきたいと思えます。ただ、気持ちとしては民間主導でやっていくんだという、大きな柱を建てていき、それが出来上がっていくのが、3期目以降の大きな課題かと思っています。

それともう一つは、アートポリスのコミッションナーによる指名方式です。これは、磯崎先生という天才を得て、初めて出来たシステムであろうと思いますし、このすばらしさは、生み出したものがすでに証明しているわけです。とは言っても一人の先生の手の内にあるわけでありまして、そこからこぼれていくもの、あるいは乗ってこないようなものをどうしていくのかなというものは、今後の問題だと思えます。例えば、コミッションナー方式を基本にしながらも、コンペが出来ないかと。色々問題ありますけど、工夫は出来るかもしれないですね。

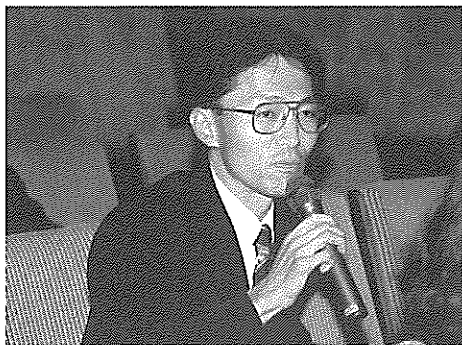
もう一つは第2期に入って、「アートポリス推進賞」が出来ましたけど、この意義というものはもつと考えないといかんと思います。アートポリスの作品ではないけれども、施主も建築家も努力をして、そして成果を上げた、そういうものを顕彰して多くの方々に見てもらうようなチャンスを作るという意味合いで、その責任は大きいんじゃないかなということも考えております。

会場●上田です。建設業です。今年、いろいろな行事に参加させていただきまして、一番印象に残ったのは、スタッフの方の黄色いジャンパーです。これは正直言って、カッコいいと思いました。下通りを歩いてても、黄色いジャンパーだけがやたら目についたというか、特別デザイン的に優れているとは言いませんけど。この「KAP」というロゴデザインをパッパッとして売ったりしても、アート

ポリスのPRにはなるかなと思います。『KAP』という、いわゆるブランドになっていくようなものだと思います。

私の会社でも、過去にアートポリスの団地をやったこともありましたが、今までの行政主導でやってきた大きい建物が、だんだん小さい建物と言うか、一般的になってくることは非常に良いと思うんですけど、ブランドとしてのアートポリスが邪魔になることもいつかあると思うんです。別の意味での抵抗が出てきて、アートポリスの価値がなくなるというか、そう言った時に、本当に熊本県民の生活と同化することなのかもしれないと思います。

堀内●ありがとうございます。



誰もが使えるように作るのが 一番大事ではないんでしょうか

会場●ヒューマンネットワーク熊本の沢田といいます。アートポリスについて、形がどうかこうとか、こだわってらっしゃいますけど、建物である以上は、お年寄りとか、私のように障害を持つたり、車椅子を使う人も利用するわけですね。今は健常者と言われている人も歳をとれば、体の自由も徐々に効かなくなってくるわけですね。形とか、見かけも大事だけど建物って一体何なのか。何のためにあるのか。ただ、形だけいいものを建てても、それはただの飾りものでしかないと思います。だから、形以上に使いやすさ、誰もが使えるように作るのが一番大事ではないんですか？ 先程、パネラーの方が、使いにくくても我慢せよと言われましたけど、それは障害を持つ人のことを考えて言われたんでしょうか。お答えをお願いします。

人の税金を使って建てられた建物を、我慢して住まわなきゃいけないというのを、今後もそういうかたちで続けるのか。これまでいろんな問題が出てきた、そういう動きが文化であったとなると、その問題というのは、県民の間で十分議論されて、みんなが納得したという風に、この8年間の総括をされているような気がするんです。障害を持った人たちも、県民市民の中に当然いるわけで、これからのアートポリスにそういった視点というのには要らないのかという議論が、全然出てこなかったというのが、議論を聞いてて、非常に感じたことです。

西嶋●先ほど、「我慢」という言葉は、私はそういうふうには解釈しておりません。公共というものは、少しずつ、何か出せるものを出し合って、一つの事を成し遂げましょうと僕は理解しています。ですから、例えばお金は懸かるけれどもスロープを造る、お金は懸かるけれどもバスを乗りやすくする。僕はそういうふうに理解しています。自分が便利なことを優先されるべきじゃなくて、やはり、自分の利害を少し削って、そういう方たちも一緒に共存できるという、僕はそのように理解をしています。

それから、アートポリスの中でも、当然バリアフリーの問題は考えられていると思うんですけど、堀内先生、どうですか。

堀内●バリアフリーが全国的な話題になってきたのは、ごく最近の話でありまして、それまではあまりそういうことを意識せずに造ってきたんじゃないでしょうか。アートポリスの建物で、現に車イスで入れない建物はたくさんあります。これは熊本城の天守閣に上れないのと同じことだと考えています。今後、そういうことについて何も考えなくていいのかというのは将来の問題であって、それが良いとは思ってませんけれども、いろいろと難しい問題があるだろうと。バリアフリーの問題と建築の美しさをいかに調和させていくかは、今後のアートポリスの一つのテーマとして取り上げられて良いのではないかと思っております。目下のところ、弱者対策が大変不備であるということは、アートポ

リスに限らず、現在建っている金
ての建物がそうだと言っている
ではないかと思っています。アー
トポリスだけが、とがめられるべ
きものだとも思わないのですが、
いかがでしょうか。

会場 ●アートポリスにその視点が
あまりにも欠けていたということ
を、身を持って実感している一人
です。今後そういうポイントを必
ず加えていただくということは、
どんな人も暮らせるのが市民社会
なんですから、それは最低限の条
件じゃないかと思っています。堀内先
生もおっしゃった様に、これから
建築家の創造力が問われるのはそ
ういう部分と、芸術的なアートポ
リスとしての意味合いが、どこで
折り合いをつけるかだと思います。
最低限の市民の参加が、利用でき
ないような建物を造るということ
は、建築家のイメージーションが
余りにも貧困ではないかなと思っ
ます。今後はそこが問われるん
だと思っています。

堀内 ●ご意見、どうもありがと
うございました。アートポリスの運
動と言うのは、一つの文化運動で
あって、町の中に新しい風景を作
ることだというご指摘もありまし
た。それから、今までは国際的評
価を得るということに重点が置か
れていたけれども、建築だけでは
なくて、町全体に広がりつつある。
そのために、例えばアートの問題
もアートポリスの中に入ってきて
いるというご指摘もありました。
それから、八代の消防署のように、
アートポリスに付随して、そこに
住んでいる人たちの意識も変わっ
てきている。今後こういう形で、

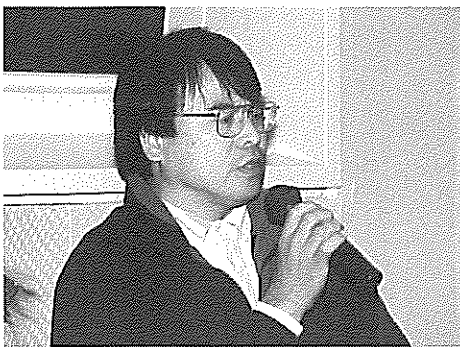
デザイナーと使用者が、直接個人
的な接触を持つようになれば、さ
らにアートポリスが楽しく面白く
なっていくのではないかとというご
指摘もありました。それから、建
物だけでなく、その周りの空間を
もって考えていくべきで、アート
を建築と一緒に考えていくべきで
あるというご指摘もございました。

それから、さつき控え室でアー
トポリスはPRが下手だという話
がありました。せっかくこうやっ
てやっているアートポリスが、殆
ど知られていない。つまりPRが
大変下手だということです。モニ
ターの方々のご意見にも、アート
ポリスモニターになるまでアート
ポリスなるものを殆ど知らなかつ
たという話がいろいろ出ておりま
した。これは県の方も含めて、我々
も含めてPRについて、もうちょ
っと真剣に取り組まなくちゃいけ
ないんだなと思っております。

それから、障害者対策について、
バリアフリーについて、もう少し
真剣に考えるべきであるというご
指摘もございました。これは熊本
県では福島知事自身が大変、熱心
に今、それを推進しておられます
し、熊本県の一つの方針にもなっ
ている訳です。アートポリスでも
出来るだけ協力出来る方向で考え
ていかなくちやならないだろうと。
ただ、弱者対策と建築の美しさ
は、必ずしも両立しない面もあり
ます。それをいかに両立させてい
くのか、考えるほどやさしいこと
ではないかと思っています。だけどア
ートポリスの建築家と呼ばれるよ
うな一流のデザイナーと一緒に力
を貸してくれるなら、熊本で新し

い建築を造っていくことも、あな
がち夢ではないのではないかと
う希望を持っております。

それから、今後の方向としては、
アートポリスの中に、民間の参加
をもう少し促進すべきだと、これ
はPR問題と背中合わせで、民間
の人たちが参加してもらえれば、
アートポリスを知ってもらうこと
がまず大事で、今後のアートポリ
スの一つの方向を示していただい
たのではないかと考えております。
以上で、本日のパネルディスカ
ッションを終わりにさせていただきます
たいと思います。どうもありが
とうございました。



成層圏から地べたまで 点から面への展開

くまもとアートポリスアドバイザー 熊本工業大学教授

堀内 清治

「くまもとアートポリス」の事業は長い期間にわたって継続されることに意味があるのであるが、オリンピックのように、4年をひと括りとして第1期、第2期と呼んでいて、4年毎にそれまでの成果を広く全国、全世界に披露する国際建築展が開かれることになっている。96年は8年目の終わりになるので、第2期の締めくくりとして「くまもとアートポリス'96」が開かれた。これは言うまでもなく、第2期の成果を要約し、その反省の上に立って第3期の事業への展望を開くことを目的としている。

その中心となる建築展覧会、都市デザインサミット、アートポリスフォーラムが11月の会期中に行われた。これらと並んで、アートポリスを起爆剤とする「まちおこ

し」の成果を発表する「まちづくり展」が清和村、泉村、山鹿市、阿蘇町、熊本市等で行われ、それぞれの地域住民をはじめ、建築関係の学校、各種協会・団体が主催する協賛事業が数えきれないほどの展覧会、シンポジウム、イベントを7月から11月にかけて県下各地に繰り広げた。これら付随行事、協賛事業の数と多彩さが今回の建築展のもう一つの特色と言ってもよく、官民挙げてこのような行事を立案し実行して下さった実行委員会の方々の献身的な御努力に対して、心からお礼を申し上げます。なければならない。

くまもとアートポリスではこれまで日本建築学会作品賞を3回、日本建築学会文化賞、BELCA賞、日本文化デザイン賞、日本文化デザイン大賞、建築業協会賞等を各1回受賞し、その他の名誉ある賞や表彰を受けたもの20件あまりにのぼっている。それらの賞の大部分は第2期の期間中に贈与されたものであるが、受賞作品の多くは第1期のプロジェクトに属し、過去8年間にわたるくまもとアートポリス事業に対する評価と考えられる。一つの県の建築活動が受ける賞の数から言って、熊本県は他県に較べて桁外れに高い割合を占めていると言わねばならず、全国から熊本アートポリスに寄せられる熱い視線や期待を裏書きするものである。国内ばかりでなく、その中には海外からの受賞もあり、

また、都市デザインサミットに参集した多くの海外の著名な建築家やデザイナー達が、くまもとアートポリスに対して敬意と期待の念を表明されるのを目の当たりにしたように、建築や芸術の世界では最も良く知られた熊本の顔となっている。

くまもとアートポリスがこのような成功を収めたのは、発足以来取ってきたコミッション制度という手法、すなわち、アートポリスに参加を希望するプロジェクトに対して、コミッションが設計を担当する建築家を指名するという制度や、磯崎新氏という現在望み得る最適任者をコミッションに迎えることが出来たことが大きな理由である。アートポリスがこれまでにあげた大きな成功を考えると、第3期においてもコミッション制度の精神を継承することは、恐らく誰にも異論のない所であらう。

ところで、第1期の4年間に実施に移されたアートポリス・プロジェクトの数は42件にのぼっていた。この間、上述したような華やかな成功を次々に収めてきたにもかかわらず、第2期の4年間ではその数は14件に減少している。県外でのアートポリスに対する期待と評価の高まりとは裏腹に、県内のアートポリス事業は速くも息切れを始めているのだろうか。アートポリスが始まってから今までに日本の社会や経済に大きな変化が

あったことは確かであるが、これほどの文化的成果をあげた事業に対して、県内の反応はいささか冷淡すぎるのではないだろうか。このような文化的不感症は一体何処から来るのだろうか。この問題の克服は第3期に向けての大きな課題である。

勿論、アートポリス事務局はこれまで手をこまねいていた訳ではない。建築家の選定に当たって、地元建築家との協力態勢を組むことに工夫を凝らしたり、アートポリス推進賞を創設してアートポリス事業の面的広がりをはかったりしているのもその一例である。また民間の有識者は「アートポリスを考える会」を設立して、民の側からの協力体制を模索し始めている。第2期に始まったこれらの努力は、やがて時と共に所期の成果を挙げてくれるものと期待している。

アートポリスには世界に向かって発言すると同時に、熊本県という地べたの地域社会の理解と共感を得なければならぬという宿命がある。これまで建築家は、なぜこうしなければいけないのか、なぜこうしてはいけないのか、といったことを平易な日常語で市民に語る努力を怠ってきた様に思われる。専門家ではない一般市民の手に建築を取り戻すためには、アートポリスが大胆にその仲介の役割を果たすことが必要な時期が来ている。

参

考

資

料

実行委員会 会則

第1章 総則

(名称)
第1条 この団体は、熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会(以下「本会」という。)という。

(事務所)
第2条 本会の事務所は、熊本市に置く。

(目的)
第3条 本会は、くまもとアートポリス参加作品はもとより、熊本の長い歴史、風土の中で蓄積されてきた建造物や、県内各地で進められているまちづくりの成果など、熊本の建築文化を広く国内外に紹介すると共に、先進的な世界の建築やまちづくりを学び、21世紀に向けた熊本ならではの新しい生活文化の創造を目指す、「熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」」を実施することを目的とする。

(業務)
第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次のことを行う。

- (一) 熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」の総合計画に関すること。
- (二) 熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」の開催準備に関すること。
- (三) 熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」の実施運営に関すること。
- (四) その他、本会の目的達成に必要な事業に関すること。

第2章 役員等

(役員の種別及び選任)
第5条 本会は、次の役員を置く。

- | | |
|-----|------------------|
| 会長 | 1名 |
| 副会長 | 2名 |
| 理事 | 50名以内(会長、副会長を含む) |
| 監事 | 1名 |
- 2 会長は熊本県知事とする。
 - 3 副会長は、くまもとアートポリスコミッショナー及びくまもとアートポリスアドバイザーとする。
 - 4 会長、副会長以外の理事及び監事は、会長が委嘱する。
 - 5 理事及び監事は、相互に兼ねることはできない。

(役員の職務)

- 6 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、この職務を代行する。
- 3 理事は、理事会を構成し、会務の執行を決定する。
- 4 監事は、民法第59条の規定に準じる職務を行う。

(顧問)

- 7 本会に顧問をおくことができる。
- 2 顧問は、会長が委嘱する。
- 3 顧問は、重要な事項について助言することができる。

(任期)

- 8 理事、監事、顧問(以下「理事等」という。)の任期は、本会の目的を達成するまでとする。ただし、理事等が委嘱時におけるそれぞれの機関及び団体の役職を離れたときは、会長は当該理事等を解職し、解職された理事等が所属する機関及び団体から理事等を委嘱する。
- 2 会長は、前項の規定により理事等を解職又は委嘱した場合は、次の総会において報告し、同意を得なければならない。

第3章 理事会

(構成)
第9条 理事会は、理事をもって構成する。

(権能)

- 10 理事会はこの会則に定めるもののほか次の事項を議決する。
 - (一) 事業計画の決定
 - (二) 事業報告の承認
 - (三) その他本会の運営に関する重要な事項
- 11 理事会は、会長が召集する。

(議長)

第12条 理事会の議長は、会長がこれに当る。

(議決)

第13条 理事会の議決は、出席理事の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第4章 専門部会

- 15 本会の専門的事項について審議するため、専門部会を置くことができる。
- 2 専門部会に關し必要な事項は、会長が別に定める。

第5章 会計

(経費)
第16条 本会の経費は、負担金、寄附金その他の収入をもってあてて。

(会計年度)

- 17 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 2 会計に關し必要な事項は、会長が定めるもののほか、熊本県の財務に關する諸規則の例による。

(予算及び決算)

第18条 収支予算は、理事会の議決を経て定め、収支決算は、監事の監査を経て理事会の承認を得なければならない。

第6章 事務局

第19条 本会の事務を処理するため、事務局を置く。

2 事務局に關し必要な事項は、会長が別に定める。

第7章 雑則

(解散)
第20条 本会は、その目的が達成されるときに解散する。

(委任)

第21条 この会則に定めのあるもののほか、実行委員会の運営に關し必要な事項は会長が定める。

附則

この会則は平成7年11月17日から施行する。

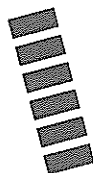
後援団体

建設省
自治省
(社) 日本建築学会
(社) 日本土木学会
(社) 日本建築士会連合会
(社) 日本建築士事務所協会連合会
(社) 日本建築家協会
(社) 全国建設業協会
(財) 日本建築センター
(社) 建築業協会
(社) 全日本建設技術協会
(社) 公共建築協会



くまもとアートポリス'96

推進体制



くまもとアートポリス'96 実行委員会

顧問

熊本県議会議長
熊本県市長会会長
熊本県町村会会長
熊本県市議会議長会会長
熊本県町村議会議長会会長

会長

熊本県知事

副会長

くまもとアートポリスコミッショナー
くまもとアートポリスアドバイザー

理事

熊本県議会建設常任委員会委員長
熊本市長
山鹿市長
阿蘇町長
渭和村長
泉村長

熊本県文化協会会長
熊本経済同友会代表幹事
熊本県商工会議所連合会会長
熊本県商工会連合会会長
熊本県中小企業団体中央会会長
熊本県経営者協会専務理事
(財) 熊本国際コンベンション協会理事長
(社) 熊本県観光連盟専務理事
(社) 熊本県バス協会会長
熊本大学学長
熊本県立大学学長
九州東海大学学長
熊本工業大学学長
(福) 熊本県社会福祉協議会常務理事
熊本県地域婦人会連絡協議会副会長
(社) 日本青年会議所熊本ブロック協議会会長
(社) 熊本県建築士会会長
(社) 熊本県建設業協会会長
(社) 熊本県建築士事務所協会会長
(社) 日本建築家協会九州支部熊本建築家の会代表

(社) 日本建築学会九州支部熊本支所長
(社) 土木学会西部支部「土木の日」熊本実行委員会委員長
熊本まちづくり協議会代表
アートポリスを考える会代表幹事
(株) 熊本日日新聞社代表取締役社長
日本放送協会熊本放送局局長
(株) 熊本放送代表取締役社長
(株) テレビ熊本代表取締役社長
(株) 熊本県民テレビ代表取締役社長
熊本朝日放送(株)代表取締役社長
(株) エフエム中九州代表取締役社長
熊本県教育長
熊本県総務部長
熊本県土木部長

監事

熊本県出納局長



事務局

専門部会

見学会部会、展示部会、シンポジウム部会、
まちづくり部会、協賛事業部会、
広報記録部会

職	所属名及び職名	氏名()は前任者
顧問	熊本県議会議長	杉森 猛夫(山本 秀久)
	熊本県市長会会長	三角 保之
	熊本県町村会会長	富永 清次(草西 信義)
	熊本県市議会議長会会長	荒木 哲美
	熊本県町村議会議長会会長	木下 重信
会長	熊本県知事	福島 譲二
副会長	くまもとアートポリスコミッショナー	磯崎 新
	くまもとアートポリスアドバイザー	堀内 清治
理事	熊本県議会建設常任委員会委員長	村上 寅美(大仁田 貞夫)
	熊本市長	三角 保之
	山鹿市長	中原 淳
	阿蘇町長	河嶋 敦夫
	清和村長	甲斐 敏
	泉村長	清水 弘(草西 信義)
	熊本県文化協会会長	三浦 洋一
	熊本経済同友会代表幹事	長野 吉彰
	熊本県商工会議所連合会会長	月田 哲雄
	熊本県商工会連合会会長	魚住 汎英
	熊本県中小企業団体中央会会長	上妻 進
	熊本県経営者協会専務理事	佐藤 亮一(緒方 克巳)
	(財)熊本国際コンベンション協会理事長	月田 哲雄(三角 保之)
	(社)熊本県観光連盟会長	竹田 勉
	(社)熊本県バス協会専務理事	岡 陽一
	熊本大学学長	江口 吾朗(森野 能昌)
	熊本県立大学学長	手島 孝
	九州東海大学学長	萩 三二(栗原 浩)
	熊本工業大学学長	中山 義崇
	(福)熊本県社会福祉協議会常務理事	小澤 豪
	熊本県地域婦人会連絡協議会副会長	田中 文子
	(社)日本青年会議所熊本ブロック協議会会長	神園 豊八郎(浦田 健二、最上 太一郎)
	(社)熊本県建築士会会長	石田 健児
	(社)熊本県建設業協会会長	岩永 研一
	(社)熊本県建築士事務所協会会長	八木 龍平(佐藤 可)
	(社)日本建築協会九州支部熊本建築士の会代表	齋藤 宏(丹伊田 稔)
	(社)日本建築学会九州支部熊本支所長	石原 修
	(社)土木学会西部支部「土木の日」熊本実行委員会委員長	秋吉 卓
	熊本まちづくり協議会代表	山田 穰
	アートポリスを考える会代表	佐藤 幸一(八木 龍平)
	(株)熊本日日新聞社代表取締役社長	永野 光哉
	日本放送協会熊本放送局局長	小口 崇彦(奥田 一重)
	(株)熊本放送代表取締役社長	小堀 富夫
	(株)テレビ熊本代表取締役社長	河津 龍介
	(株)熊本県民テレビ代表取締役社長	松村 準平
	熊本朝日放送(株)代表取締役社長	山本 博昭(林田 正恒)
	(株)エフエム中九州代表取締役社長	長谷川 孝道
	熊本県教育長	松尾 隆樹(東坂 力)
	熊本県総務部長	永野 義之(高橋 正樹)
	熊本県土木部長	川上 隆
監事	熊本県出納局長	藤川 冽(池田 隆)

部会名	職	氏名	所属
見学部会	部会長	牧野 裕三	(有) S D A建築設計事務所
	副部会長	田中 穂積	(株) 日勤工務店
		塩田 栄一郎	熊本市拠点整備課
		千原 政晴	(株) 岩永組
		井上 勝博	熊本県住宅課
		田中 誠	熊本県景観整備課
		淵上 裕一朗	熊本県建築課
展示部会	部会長	中川 久	(有) 中川建築設計事務所
	副部会長	作村 嘉俊	(株) 作村技建工業
		新名 敏司	共立建設(株)九州支店
		小材 健治	ばん設計小材事務所
		小林 至	熊本県営繕課
		田辺 肇	熊本県営繕課
		元木 智明	熊本県建築課
シンポジウム部会	部会長	古川 裕久	(株) 桜樹会・古川建築事務所
	副部会長	園田 和美	一級建築士事務所 蔵健
		廣田 清隆	廣田建築都市設計工房
		富田 潤一	(株) 富坂建設
		中尾 憲征	熊本県営繕課
		椎葉 清六	熊本県営繕課
		上妻 清人	熊本県建築課
まちづくり部会	部会長	桂 英昭	熊本大学工学部建築学科
	副部会長	山田 稔	九州東海大学工学部建築学科
	熊本委員長	後藤 道雄	(有) 中九州建設
	副委員長	宮木 竹雄	大和設計(株)
A班		西田 健一	熊本デザイン専門学校インテリアデザイン科
		渡辺 道治	九州東海大学工学部建築学科
		大久保秀洋	熊本市施設保全課
		宮崎 美穂子	熊本市建築課
		黒木 健司	熊本県商工会議所連合会
		東 直	熊本県商工会連合会
		大山 清勝	熊本県中小企業団体中央会
		田上 克己	熊本県地域婦人会連絡協議会
		酒匂 士郎	熊本市立三和中学校
		七谷 亜紀彦	スペースバンブー
		増永 淳	(株) 増永総合計画
		西郷 正浩	熊本工業大学建築学科
		前田 直樹	熊本県営繕課
B班		坂田 一幸	風設計室
		入江 雅昭	I G A建築計画
		滝澤 龍一	西釜建設(株)
		田中 之博	(株) 田中建築設計事務所
		西尾 剛人	(株) 三津野建設
		大森 健弘	(有) 大森ビル
		吉井 舘二	(有) ヨシイ・デザイン・ファクトリー
		橋本 博志	(株) 橋本建設

	立川 重治	たちかわ宝飾
	小森 祐光	小森金属製作所
	松永 壮	松永壮デザイン事務所
	坂本 正文	清和村立清和小学校
	宮崎 康輝	三ツ矢建設（株）
	井上 正敏	熊本県立熊本工業高校インテリア科
C班	新納 至門	新納至門設計事務所
	伊東 龍一	熊本大学工学部建築学科
	黒葛原 潔	熊本市教育委員会青少年課
	宮原 光治	熊本県営繕課
	古江 俊夫	熊本県営繕課
	受島章太郎	熊本県建築課
D班	東野 洋尚	熊本市住宅建設課
	中島 隆	熊本市都市計画課
	古賀 文晴	熊本市建築指導課
	久保田 昇	（福）熊本県社会福祉協議会
	松尾 伯方	伯建築事務所
	瀬崎 正博	（有）裕建築事務所
	村上 隆光	（株）弦設備設計事務所
	福田 岸生	西日本電工（株）
	上田精一郎	共栄設備工業（株）
	大住 和子	模書房
	高瀬隆三郎	（株）エリアネット
	内記 英文	熊本大学大学院工学研究科
	加納 義之	熊本県営繕課
	原口 利正	熊本県営繕課
協賛事業	部会長 郷藤 宏	（有）環境建築工房
	副部会長 武末 博司	武末建設（株）
	佐藤 逸郎	サンエス設備機器（株）
	佐藤 匠	大晃建設（株）
	三宅 康則	熊本県営繕課
	那須 博文	熊本県住宅課
	田口 順也	熊本県建築課
広報記録	部会長 高濱 紘	（株）中央総合建築事務所
	副部会長 宮本 茂弘	宮本建設（株）
	上野 裕典	熊本市市街地再開発課
	荒木 一正	（有）建築事務所ISSEY
	森本 隆史	熊本県営繕課
	北原 宏	熊本県営繕課
	小路永 守	熊本県建築課

くまもとアートポリス'96

まち・むらづくり展
実行委員会

●くまもとアートポリス'96 清和むらづくり展実行委員会

委員長	甲斐 敏	清和村長
副委員長	吉見 孝道	清和村商工会会長
	武原 豊記	大川区区长
	興格 二明	清和村商工会
	佐野 勝義	J A 熊本清和農協
	佐藤 範俊	清和村森林組合
	兼瀬 哲治	清和村文楽の里協会
	高本 勝之	清和村教育委員会
	岡本 和利	清和村役場
	倉岡 真治	清和村役場
	田上 正信	清和村役場
	松田 信雄	清和村役場
	渡辺 八千代	清和村役場

●くまもとアートポリス'96 阿蘇まちづくり展実行委員会

委員長	佐藤 敏清	熊本県建築士会阿蘇支部長
副委員長	西村 達也	阿蘇町商工会
	河崎 敦夫	阿蘇町長
	森 今朝一	阿蘇町教育長
	石本 春夫	阿蘇町商工会
	小笠原徹朗	阿蘇町観光協会副会長
	和田 真幸	阿蘇町温泉観光旅館組合
	内藤 正良	阿蘇町区長会
	丸山 信義	阿蘇町農業協同組合
	河崎 徳雄	黒川農業協同組合
	塚本 則夫	阿蘇中郡森林組合
	友田 初音	阿蘇町婦人の会
	村上 ミツ子	阿蘇町婦人の会
	塚本 エミ子	阿蘇町婦人の会
	柳川 栄一	阿蘇町農業協同組合
	中島 秀成	黒川農業協同組合
	梅井 俊夫	熊本県建築士会
	山内 孝幸	熊本県建築士会
	工藤 文章	熊本県建築士会
	家入 誠	熊本県建築士会
	松永 正明	阿蘇町写真会
	江藤 長利	阿蘇青年会議所
	谷崎 利浩	来夢倶楽部
	小野寺 浩	環境庁九州地区国立公園・野生生物事務所長
	北沢 克己	環境庁九州地区国立公園・野生生物事務所
	村上 隆則	県一の富士木事務所
	簗田 公彦	県阿蘇事務所総務振興課
	若井 康彦	(財) 阿蘇環境デザインセンター
	村上 弘雄	(財) 阿蘇環境デザインセンター
	楳林 力也	(財) 阿蘇環境デザインセンター
	宮本 健二	阿蘇町役場
	宮本 孝誠	阿蘇町役場
	成瀬 幸輝	阿蘇町役場
	山内 光男	阿蘇町役場
	森 範雄	阿蘇町役場
	佐藤 伸敏	阿蘇町役場
	山内 憲一	阿蘇町役場
	小島 正一	阿蘇町役場
	日田 勝也	阿蘇町役場
	山本 繁樹	阿蘇町役場

●くまもとアートポリス'96 山鹿まちづくり展実行委員会

委員長	井上 勝介	熊本県建築士会山鹿支部長
副委員長	西田 泰三	豊前街道まちづくり研究会 (九日町商店街)
	竹熊 辰喜	熊本県建築士会山鹿支部
	中村 美敏	熊本県建築士会山鹿支部
	富田 哲也	熊本県建築士会山鹿支部
	田嶋 一博	豊前街道まちづくり研究会 (市観光協会)
	河田 久徳	豊前街道まちづくり研究会 (建築士会)
	本田 幸嗣	豊前街道まちづくり研究会 (中町商店街)
	井口 圭祐	豊前街道まちづくり研究会 (下町商店街)
	福山 博章	山鹿八千代座敷敷会
	中村 啓介	山鹿八千代座敷敷会
	山並 保	県鹿本事務所総務振興課
	西川 典利	県山鹿土木事務所
	樹岡 守人	山鹿市役所
	有働 郁夫	山鹿市役所
	池田 永実	山鹿市役所
	徳永 隆雄	山鹿市役所
	有働 精一郎	山鹿市役所
	三森 兄臣	山鹿市役所
	福永 浩	山鹿市役所
	古家 忠興	山鹿市役所
	藤本 敬輔	山鹿市役所
	早田 順二	山鹿市役所
	長迫 三紀夫	山鹿市役所
	瀬口 慎哉	山鹿市役所
	木村 理郎	山鹿市役所
	福田 芳子	山鹿市役所

●くまもとアートポリス'96 泉むらづくり展実行委員会

委員長	佐伯 次義	泉村助役
	橋口 慧	泉村議会
	森崎 盛人	泉村森林組合
	松尾 幸男	J A 八代地域
	山本 賢	農業
	炭 道生	林業
	松本 波川	泉村観光協会
	東山 輝男	泉村商工会
	松本 洋子	泉村婦人会
	坂田 一成	青年団体
	宮崎 金義	泉村建築業
	藤崎 英信	いずみシンボ塾
	澤村 勝士	泉村役場
	西坂 栄樹	泉村役場

媒体

1 テレビ

「番組」

- アートポリス街道 熊本県民テレビ
平成8年4月～9月 26回放送
- 週刊山崎くん 熊本放送 平成8年11月19日放送
- 21世紀への息吹 熊本放送 平成9年1月11日放送

「スポット」

- くまもと笑顔探訪 熊本朝日放送 月曜日19:54～20:00
2回放送
- くまもとアラカルト テレビ熊本 土曜日12:15～13:00
2回放送

「CM」

- アートポリス展覧会告知CM
平成8年11月中に計80回 放送

2 ラジオ

「番組」

- アートポリスのあるまち 熊本放送 平成8年8月～10月
13回放送

「スポット」

- 県庁ダイアリー FM中九州 7:30～7:36 5回放送
- ふれあいくまもと 熊本放送 7:36～7:41 7回放送

3 新聞

- 特集広告 熊本日日新聞 平成8年10月31日付
4ページ特集
- アートポリスモニター募集広告 熊本日日新聞
平成8年8月1日付

4 情報誌

- アルカス（日本エアシステム 機内誌） 平成8年11月号
- くまもとの旅 89号「熊本の建築美を訪ねる」
平成8年11月
- シティ・リビング
計5回掲載

5 インターネット

- 平成8年5月8日～12月14日までホームページを開設

6 行政情報誌

- 県からのたより 平成8年夏号 掲載
- 市町村広報誌 県内全市町村に掲載を依頼

後援・協賛団体

■後援団体

建設省
自治省
(社) 日本建築学会
(社) 土木学会
(社) 日本建築士会連合会
(社) 日本建築士事務所協会連合会
(社) 日本建築家協会
(社) 全国建設業協会
(財) 日本建築センター
(社) 建築業協会
(社) 全日本建設技術協会
(社) 公共建築協会

■協賛団体

(社) 熊本県建設業協会
(社) 熊本県建設業協会建築部会
熊本県電気工事業工業組合
(社) 日本電設工業協会九州支部熊本地区
熊本県管工事業組合連合会
(社) 熊本県造園建設業協会
(社) 熊本県木材協会連合会
(社) 熊本県建築士事務所協会
熊本県建材懇話会
協同組合熊本県鉄構工業会
熊本県塗装業協同組合
熊本県ビルリフォーム協同組合
熊本県景観整備施設業協会
(社) 熊本県宅地建物取引業協会
熊本県設備設計事務所協会
熊本県生コンクリート工業組合
熊本県防水工事業協会
(社) 熊本県建築士会
(社) 日本建築家協会九州支部熊本建築家の会
熊本県タイル組合
熊本県防水改修業協同組合
熊本県コンクリートブロック工業組合
熊本県セメント瓦工業組合
熊本県建築組合連合会
熊本県左官業組合連合会
熊本県鉄筋工事業協同組合
(社) 熊本県地質調査業協会
(財) 熊本県建築住宅センター
熊本県解体業協会
博多デザイン倶楽部
TOTO熊本営業所
(株) INAX南九州支社
東リ(株)
(株) ウッディファーム
(株) ザイソー橋口
日本住宅パネル工業協同組合
(株) 肥後銀行
熊本県商工会議所連合会
西部ガス(株) 熊本事業本部
(株) 鶴屋百貨店
九州産業交通(株)
(株) ニュースカイホテル
熊本県労働金庫
(株) 日本交通公社熊本支店
(株) 熊本ホテルキャッスル
日本電信電話(株) 九州支社

●印刷物

タイトル	目的・種類	規格	部数
●くまもとアートポリス'96 総合記録	くまもとアートポリス'96の概要記録誌	A4	2500部
●都市デザインサミット	都市デザインサミットの記録誌	A4	2000部
●熊本まちづくり展	熊本まちづくり展の記録誌	A4	1500部
●山鹿まちづくり展	山鹿まちづくり展の記録誌	A4	1500部
●阿蘇まちづくり展	阿蘇まちづくり展の記録誌	A4	500部
●清和むらづくり展	清和むらづくり展の記録誌	A4	500部
●泉むらづくり展	泉むらづくり展の記録誌	A4	500部
●くまもとアートポリス '96 チラシ第1弾	くまもとアートポリスの'96の開催告知	A4	10,000部
●くまもとアートポリス '96 チラシ第2弾	くまもとアートポリスの'96の催し紹介	A4	40,000部
●くまもとアートポリス '96ポスター	くまもとアートポリスの'96の催し紹介	A1 A3	500部 1,000部
●くまもとアートポリス '96パンフレット	アートポリスの概要紹介、 各イベント紹介	A4	2,500部
●くまもとアートポリス ガイドブック	アートポリス参加プロジェクトの紹介	A4変形判	12,000部
●くまもとアートポリス ガイドマップ	アートポリス参加プロジェクトの紹介	A3	150,000部
●アートポリス展覧会 リーフレット	アートポリス展覧会の紹介	A4	20,000部
●秋の見学会ツアー リーフレット	見学会の参加者募集告知	A4	3000部
●都市デザインサミット パンフレット	都市デザインサミットの日程、内容案内	A4	2,000部
●会場案内図	都市デザインサミットの会場案内マップ	A4	2,000部
●アートポリスフォーラム チラシ	アートポリスフォーラムの日程、内容案内	A4	1,000部
●アートポリスへの メッセージ	アートポリスモニターの意見紹介	B5	250部
●ART RING ポスター	アートリング展のイベント案内	B2	1,000部
●ARTRING INFORMATION	アートリング展のイベント案内	A3	5,000部
●山鹿まちづくり展 ポスター	山鹿まちづくり展のイベント案内		200部
●山鹿まちづくり展 チラシ	山鹿まちづくり展のイベント案内	A4	2,000部
●阿蘇まちづくり展 チラシ	阿蘇まちづくり展のイベント案内	A4	2,000部
●清和むらづくり展 チラシ	清和むらづくり展のイベント案内	A4	1,200部
●泉むらづくり展 チラシ	泉むらづくり展のイベント案内	A4	1,500部

座談会

取材者が見た
くまもとアートポリス'96

約半年にわたって熊本県内各地で様々なイベントが繰り広げられた「くまもとアートポリス'96」

これを記録・編集するに当たって、各イベントの取材を担当したのは5人の女性記者たち

彼女たちが「くまもとアートポリス'96」をどのようにとらえたのか、

また、アートポリスから受けた影響は？

記録誌の締めくくりとして、広報記録部会の4人の委員を交えて座談会を開き

「くまもとアートポリス'96」を振り返ってみた。

建築でむらおじしてる
建築の威力を思い知らされました

高濱 ●司会をさせていただきます
広報記録部会長の高濱です。

今日は、アートポリス'96を取材された方々に、アートポリスについての印象や影響を受けたこと、あるいは、今後のアートポリスはこうしたらいいんじゃないかというようなことを、お話ししていただけたらと思います。お集まりいただきしました。

内空閑 ●私が一番印象に残ったのは、このイベントのはじめに取材した「清和むらづくり展」で会った男の子の言葉です。「文楽館を一番誇りに思っている。高校生になったらじいちゃんに文楽をならうんだ」と誇らしげに言うんです。建物が文化に貢献するとか、地域のアイデンティティを向上させるとか、アートポリスはそのように謳っています。まさしくそのものを実感させる出会いでした。

三宅 ●私は8月に行われた「見学ツアー」に同行して密着取材をしました。全国の建築を勉強している学生さんや、それに携わる業者の方を集めてのツアーだったんですが、私自身の中で「アートポリスって何だろう、デザインだけに頼っているのでは」と感じていたんです。ツアー中、学生さんたちに意見を聞いたり、建築家の先生

たちの説明を聞いて、自分の中で価値観が変わったんです。すごくいい経験になりました。建物を見ると、外観を見るだけじゃなくて、中に入って天井をまず見上げる癖がついたんです。自分の中で、建物の見方が変わりました。

岡 ●私は、新地団地の「アートポリスにオーケストラがやってきました」、

「阿蘇まちづくり展」、

「学生シンポジウム」などを見ていただきました。今回感じたのは、建築に関する知識がないということです。会場でも難しいと思って話を聞いていた。後で原稿にする時に備えていろいろ調べたりしましたが、やはり難しく、高度な知識が必要だと感じました。

松村 ●私は「熊本まちづくり展」を担当したんですが、私もシンポジウムはあんまり難しくなくて、眠くて仕方ありませんでした(笑)。逆に面白かったのは、「環境・文化発見オリエンテリング」でサイロにペンキで絵を描いたことと、「竜蛇平団地夏まつり」。どうしてこの2つが面白かったかと言うと参加型だったからではないでしょうか。やっぱり自分が参加できるイベントのほうが楽しかったように思います。

高濱 ●参加して良かった、面白かったと言われるのは、人、建築家との触れ合いができたということでしょうね。

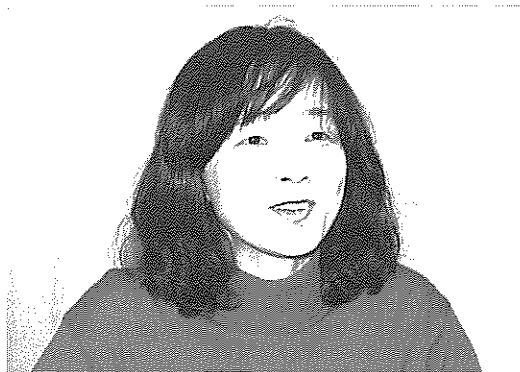
荒木 ●松橋の協賛事業で、子どもが参加して意見を述べるというイ

高濱 紘 広報記録部会長





荒木 一正 広報記録部会委員



内空閑 裕子 (株)スタジオ談

出席者

●広報記録部会

高濱 紘 会長(司会)
宮本 茂弘 副会長
上野 裕典
荒木 一正

●取材担当記者…(株)スタジオ談

内空閑 裕子
岡 真理子
三宅 順子
松村 由紀
中川 亜紀

●くまもとアートポリス'96事務局 高三瀬 晋

ベントあつたんですが、あれもとてもよかったですね。

中川●私は「山鹿まちづくり展」を担当しました。山鹿生まれの山鹿育ちで、今も山鹿にいます。山鹿のことなら何でも知っているつもりだったのですが、山鹿の良さを何も分かってなかったんだと実感しました。3日間じっくり時間をかけて歩いて、山鹿の良さを再発見しました。知らない山鹿に出会えました。

八千代座の復興のきっかけとなった老人会のおじいちゃんやおばあちゃん、それから八千代座運営に頑張っている八千代座棧敷会のメンバー、八千代座や豊前街道を軸に山鹿のまちおこしをしようとしている人など、たくさんの人々に出会いました。大きなことはできないにしても、私も山鹿市民として協力しよう、そんな気持ちで湧いてきました。次は私たちの番です。おじいちゃん世代に負けないよう、素敵な山鹿を作りたいと思いました。

内空閑●清和文楽館もただデザインが美しいだけでなく、私自身も熊本城が誇りだったように先程の子どもの「誇り」となっている。アートポリスって、その地域の可能性のようなものを引き出すことができる。建築はハードだけじゃなくて、もうソフトの部分にも影響を与えるということが分かりました。建築ってただの石じゃない、コンクリートじゃないんだって…

建築をもっと分かりやすくする 工夫が欲しかったですね

内空閑●先程、眠気がしたとか言っていましたけど、これは私どもの率直な意見でして、内容が素人にはとても難しかったと思います。会場でも建築関係の人にしか分かんかったのではないのでしょうか。普通の人にも理解できるようにも

つとわかりやすい言葉がよかったと思います。そういう点では、「構造シンポジウム」や「設備シンポジウム」は身近な話題でよかったですね。アートポリスを本当に県民のものにするには、その辺のことも考えた方がいいのではないのでしょうか。

高濱●アートポリスは、一般の人に建築を身近に感じてもらうというところもあるわけで、見学やシンポジウムに参加された一般の人達にも、もう少し配慮が必要だったということでしょうか。

内空閑●建築家だけに分かるイベントならもっと小規模でいいわけで、県民参加型にする必要がありますよね。建築以外の分野から建築を叩いてみるとか。



三宅 順子 (株)スタジオ談



岡●それから、都市デザインサミットで出た意見なんですけど、建築を建築の観点からだけで見るのではなく、例えば建物もアートから考えると、もっと違うジャンルの人の意見に耳を傾けると面白いかもしれませんね。

荒木●私は前回のアートポリス'92から参加させてもらっていますが、思ったのは、都市デザインサミットのウェートが高いということです。でも本当は建築をとりまく“人”が主役じゃないかと常々思っております。そして、先程からみなさんの話を聞いていて、媒体は人だと今更のように感じました。

建築とはどんなものかを アートポリスは目覚めさせて くれましたよ

松村●アートポリスというと、奇抜な建物という印象が一般的にありますよね。ところが、最後のフォーラムで、滝悦子さんが日光東照宮の話をされたんです。山の中に赤や金色のあんな派手な建物を造った当時は、たぶん今のアートポリスと同じ印象を与えていたん

ではないかということでした。それが日光東照宮は、今では伝統建築として観光名所にもなっている。もしかしたらアートポリスも初期の日光東照宮ではないかと。その話を聞いて、そういう見方もあるなど改めて気付かされました。30年後、アートポリスの建物が今とは違った風景になるのではないかと楽しみです。

三宅●私は、蘇陽町の馬見原橋が印象に残っているんですが、本当に気持ちのいい橋なんです。設計された青木さんがおっしゃるには、体感できる橋だそうで、確かに歩くと木の音がカンカンと響くし、橋の真ん中に開いた穴から川面を見ることができると。すごく好きになって、福岡から来た友だちにも話をして連れて行っただけです。その友達が気に入ってほかの人を連れていく。そんな風にアートポリスのファンを増やすきっかけになったのではと思っています。

岡●私は以前は建築に対してあまり興味がありませんでした。自分は知識もないし、興味もない、わからないと決めつけていたんですね。でも、今回の仕事で、建物は技術が建てるのではなく、技術を使って「人間」が建てているということがわかり、ずいぶん身近なものになりました。建築はおもしろいです。コミッショナーの磯崎さんの話を聞いてみると、哲学を感じますよね。すごく大きいスケールの考え方というか。100年後はどうなっているのだろうか、

そういう考えにそって思いを形にしていくなか、それがすごく面白かったです。建物も実際に行ってみようと思いましたが、今までは好きでもきらいでもない、関係ないものとして見ていたものが、関係あるものになってきました。

宮本●熊本の町は、どこもレベルアップしていると思います。ずっと運動として続けていくべきです。後世に残るもので止めたいかん。建築がみんなの目にさらされることとがいいのです。アートポリスはみんなに改めて、建築とはどんなものかを確かに目覚めさせてくれましたよ。

三宅●アートポリスについては勝手な思い込みがありましたが、馬見原橋を見た時、手すりとかビスとかごつくて、ポコポコ出でて、本当はカッコ悪いはずなんですけど、それがかえっていいんですよね。構造面をクリアしつつ、デザインもいい。建築家の青木さんは、「わざわざ見に行くような橋じゃなくて、町の人がここにくると気持ちいいね、とか安らぐね、というものを造りたかった」と。それを聞いて、自分の中でアートポリスの価値観がガラッと変わりました。見学会では建築家自身が、自分が造った建築物を目の前にして語ってくれたので、建物はずっと身近に感じられたと思うんです。それを聞かなければ、ただの橋だとずっと思っていたかもしれない。

内空閑●清和文楽館の舞台棟の屋根を、設計者の石井さんは、子ど



高三猪 晋 くまもとアートポリス'96事務局



中川 亜紀 (株)スタジオ談



宮本 茂弘 広報記録部会

我々の意見を建築家に フィードバックさせたいですね。

上野●1992年以来、花畑町、江津湖のトイレなど一連のアートポリス事業に携わって来ました。アートポリスは非常にお金がかかるという話をよく耳にします。そこまですてアートポリス事業をしなくてはならないのか。しかし、逆にそこまですてたから、国を越えて多くの人が見に来るとも考えられます。先程からおっしゃっているように、起爆剤としての意味は

もたちに「あれは清和に住むタニシなんですよ」と説明されているんですが、とても分かりやすくて、身近に感じますよね。他のアートポリス建築に関しても、設計者のそういった一言があるといいなと思います。

高三瀬●僕は、ちょっと違う意見です。建築家に話を聞いて、その建物を評価をするというのは、ずるいなと思います。作者からその思い入れを聞くと、純粋さがなくなるという気がするんです。それは、過度な情報で純粋な評価ではなくなるんです。建築デザイナーがこういうつもりで造りましたというのには余計な情報になると思うんです。作品で勝負してもらいたいなと思います。

あるかと思うのですが。コンクリート打ちっぱなしの壁があつたり、雨が流れ込んだりして、使いにくいという意見を聞いた事もあります。今までの団地ならこんなことはなかったと思うのですが。建物というのは、人間を包み込む器とも考えられます。使いやすさ、利便さ、機能性というのが一番で、それにプラスアルファがデザインじゃないかと思っています。アートポリスはそれを逸脱している点があるのではないかなと疑問視しています。

宮本●私も建設業者としてアートポリスに関わってきました。新地団地のE棟とかはコンクリート打ちっぱなしで作り方が非常に難しい。大工さんの腕次第というデザインでした。また、新地団地に限らず、アートポリスの建物は建築家のエゴで設計されている、そんな批判も聞こえてきます。話題性としてはいいかもしれないけど、アートポリスが、建築家のエゴであつてはいけないと私は思います。

高三瀬●それを利用する人がエゴと認定したのであれば、その人に「エゴなんだよ」と伝えるべきで、あんなエゴは勘弁してちょうだいというのが必要です。みんなの評価が低かったらそれだけのものなんです。マイナスの評価を作者に与えるべきなんです。我々の評価で作者の生きる道を変えさせたいですね。我々の意見を建築家にフィードバックさせたいですね。



松村 由紀 (株)スタジオ談



宮本●使ってみないと分からない

ということはありませんが、重要なのは「機能」です。でも、それをやめさせるのは、県民、マスコミであって、それを我々が前もってやめさせることはできないですよ。

内空閑●県民の声を聞くのも必要ではないでしょうか。意識を変えるのが県民なら、もっと広く知らしめるべきだと思います。広報は情報を発するだけでなく、拾うこともしくはなくては。それから女性や子どもにも分かる、参加できるイベントを考えることも必要ではないでしょうか。

高三瀬●今回、マイナスの評価を聞くチャンスはあったのでは。

内空閑●もっと大々的にでも良かった？(笑)

高濱●建築は、奥が深くいろんな要素があり、出来上がるまでには時間がかかるもので、短絡的には結論はでないと思います。気長に取り組まなくては考えます。一般の人の参加云々については、広報の手段、方法を検討しなければならぬのではないかと思います。

内空閑●見るだけではなく、参加するだけじゃ面白くなく、取り組むことを考えて欲しいですね。

上野●今後は、建物だけではなく、経済的な効果も考えて、観光や商工などがタイアップされれば、このアートポリス事業がもっと生かされるのではないのでしょうか。例えば、馬見原橋の近くには素晴らしい石橋もたくさんあります。これらを広く組み込んで、例えば、

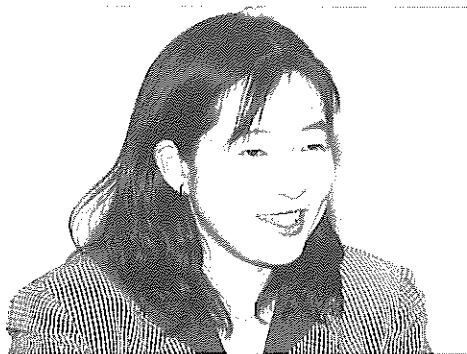
歩くルートを作るとか…。

今後のアートポリスが楽しみ これは続けてほしいです

内空閑●三角のビラミッド、あれもとてもユニークで好きなんです。が、残念なことに、中には人が居なくて、売店も閉まっているそうですね。建築を100年残そうとか、文化遺産とか言っているわりには、その辺のソフトがお粗末ですよ。いいものを作ったからといって、価値が認められるとは限りません。いいものを育てていくのが大切ではないでしょうか。ソフト教育を。それには広報が足りないのでは？ 私の周りでもアートポリスを知っている人は少ないですね。4年に1度ではなく恒常的に知らせていく必要があります。例えば、小学生の見学旅行とか、5分間番組とか、シールとか…。

高濱●機会あるごとに何かしようということですね。

高三瀬●4年に一度のイベントではなく、その間の3年間で大事だと思わなければ。情報を持ちたい人に情報を与えないといけないということ。ただ漫然とではなく、情報を与えなければならぬ人達を細かく区分しなければならぬと痛感しました。



岡 真理子 (株)スタジオ談

上野 ●県民から運動を続けようという声が出るようにしなければなりませんね。

高濱 ●アートポリスのおかげで、まちづくり・まちおこしが軌道に乗ったというところもありますが、これも結果がでるまでには時間がかかります。みんなの意識が向上して清和村のように、アートポリスが起爆剤となり村民の方達の意識の高揚があつてまちづくりができた。この様なことが各地域へ広がっていけばと思います。

批判だけではダメで、何かを提案していかなくては。建築が文化として見られるように。万人に好かれる建築はできないが、批評はできます。そこから会話が起き、人々の興味も増して、最終的には、官主導型から民主導型へと変わっていくたら、いいですね。

宮本 ●それが目的だったんですがね。

三宅 ●建物の評価はずっと先になつて結果が出てくる。長い目で見ていかないと。私たちの世代だと、すでに建物や家の固定観念が根付いているから、その中にアートポリスの建物が入ると確かに違和感があります。でも、小国の西里小学校の木造ドームは、よそから見ると珍しい空間だけど、小学校の子どもたちからすれば当たり前の空間になっている。そんなアートポリスの中で育つた子どもたちがどんどん育つていって、のちに建築家になる子がでるかもしれない。

宮本 ●今は長いスパンの中の過渡期だと思っています。

三宅 ●アートポリスの環境で育っている子どもたちは、大人になつた時、あれが当たり前と受け入れるセンスができるのではないでしょう。その時やつと「文化」と言えるのかもしれない。

岡 ●私は今回、熊本でアートポリスという世界でも珍しい試みが行われていることに誇りを持ちました。でも大切なのは、本当に必要なものを、よく考えた上で造っていく、その根底にアートポリス構想という全体をまとめるものがあると思います。

私は今後のアートポリスが楽しみです。熱しやすく冷めやすい気質と言われる熊本県人ですが、これは続けてほしいです。ここで止めたならそれこそアートポリスって何だったのかということになりかねません。建築は良くも悪くも長期的なもの。長いスパンで見えていくべきだと思います。特定の専門家だけでなく、建築はもつと人と人が自然につながっていけるよう、文化的な役割を担ってほしいです。だからそのために4年に1回の建築展でも、もつといろいろなことをやってほしいですね。

宮本 ●運動にしましょう。

三宅 ●続けましょう。

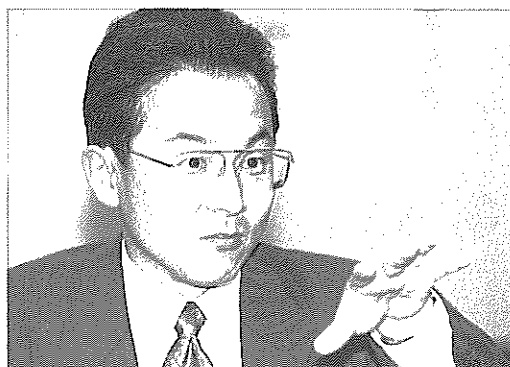
宮本 ●運動を進めていくだけの作品をやっばり造っていかないとね。

岡 ●反省もしつついい方向に目を向けていかなければいけないと思

います。マイナスはマイナスとして、隠すのではなく残す。

高三瀬 ●ちゃんと伝えていかなければいけませんね。

高濱 ●これまでアートポリスのことをよく知らなかった皆さんが、今回のイベントを経験されて、その結果、アートポリスをこれからも続けた方がいいとおっしゃっている。これは大変意義のあることだと思います。批判の声は、耳にするのですが、「なかなか良いね」という意見は上がってこないものです。で、今日はちよつと嬉しく思いました。ただ、それもこれも県民の方々に、今回のみなさんのようにイベントに参加してもらつてアートポリスをよく知つてもらふというのが大前提でして、そのためには広報の仕事が今後の重大な課題となるのではないかと思います。本日はどうもありがとうございます。



上野 裕典 広報記録部会委員

「くまもとアートポリス'96」

総合記録

KUMAMOTO ARTPOLIS'96 COLLECTION

1997年3月発行

編集・発行 熊本国際建築展「くまもとアートポリス'96」実行委員会
事務局：熊本県土木部建築課内
〒862-70 熊本市水前寺6丁目18-1 TEL096-383-1111

企画・制作 株式会社熊日広告社、有限会社エアーズ
デザイン 株式会社フォリオ

印 刷 凸版印刷株式会社

●総合記録

○都市デザインサミット

○熊本まちづくり展

○山鹿まちづくり展

○阿蘇まちづくり展

○清和むらづくり展

○泉むらづくり展

KUMAMOTO ARTPOLIS '96